

一般国道9号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II

鳥取県西伯郡淀江町

IMAZU TSUKADA

## 今津塚田遺跡

FUKUOKA

福岡遺跡(6区)

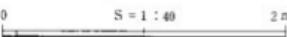
1993

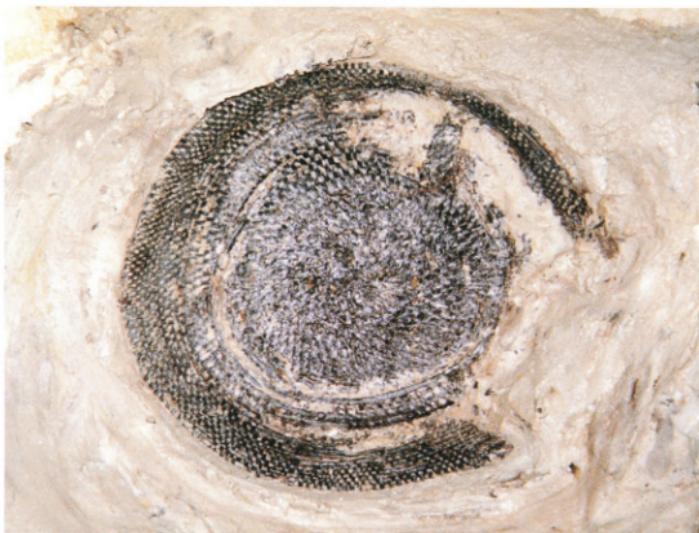
財団法人  
建設省

鳥取県教育文化財団  
倉吉工事事務所

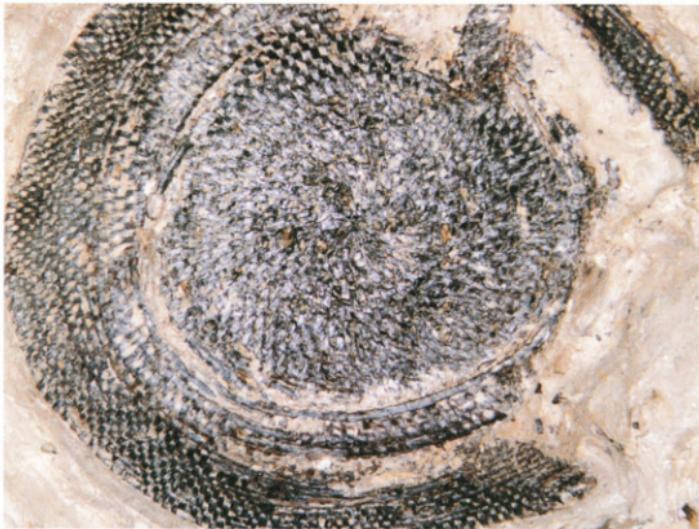
## 正 誤 表

(今津塙田遺跡・福岡遺跡 6 区)

頁		誤	正
4	16行	流域面積	流域面積
5	18行	火山円錐岩凝灰角礫岩	火山円錐岩、凝灰角礫岩
6	3行	出土	出土
	31行	勾玉	勾玉
46	SK-644	③黒褐色粘質土少量混	③黒褐色粘質土少量混
48		 0 S = 1 : 20 1m	 0 S = 1 : 40 2m
51	28行	底脚坏	低脚坏
52	1行	P65	P64
	3行	SK-639	SK-640
61	2行	△残在値	△残存値
	Po1	①16.6△	①16.6※
	Po5	以外	以下
	Po7	以上	以下
	Po14	内外面スス付着	外面スス付着
	Po17	剝離	剝離
62	Po27	①14.0※ ②3.4※	①14.0○ ②3.4△
	Po28	②1.2※ ④13.3※	②1.2△ ④13.3○
	Po29	②0.6※ ④7.0※	②0.6△ ④7.0○
64	表1 W22	板状	棒状
	30行	除除に	徐徐に
66	34行	便宜状	便宜上
	39行	便宜状	便宜上
67	20行	(1986)	(1985)
68	20行	現像	現象



S K -620出土 編籠 (B1)



編籠底面 (B1)

# 序 文

科学技術の進歩により情報化社会の到来が実現し、今日では国際文化交流の必要性が語られるようになっています。地球上に住む人間がこれまで築き上げてきた文化は、地域の気候・風土により異なる様相を呈しますが、それぞれすばらしい人間の知恵により長き時間を経て結実したものであります。文化の交流を深めるには、まず、互いの文化を認め合い相互に理解していかなくてはいけません。そのためには自身の文化を十分に知り、異文化を受け継ぐ人たちにもその良さを伝える必要があります。

鳥取県内には優れた文化遺産が数多く存在します。なかでも、最近の発掘調査によって注目を集めた上淀磨寺については、私たちも驚かされたほどです。日本国内はもとより、世界的にも大いに自慢できる仏教文化遺産のひとつです。私たちは、喜びと同時に、これら先人の築き上げてきた文化を未来へつなぐという責任の重大さを強く感じています。

このたび、建設省による一般国道9号米子道路の工事が決まり、その事前調査を鳥取県教育文化財団が行っています。ここにその一部の調査成果をまとめ、今津塚田遺跡・福岡遺跡（6区）の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。皆様に活用していただければ幸いです。

おわりになりましたが、今回の調査に御理解と御協力を頂いた地元の皆様をはじめ、関係各位に心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財團法人鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

## 例　　言

- 1 本報告書は、一般国道9号米子道路工事に伴う、鳥取県西伯郡淀江町大字今津並びに大字福岡に所在する今津塚田遺跡・福岡遺跡6区（福岡所在遺跡）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省倉吉工事事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団西部埋蔵文化財調査事務所が行った。なお、今津塚田遺跡は1989年の淀江町教育委員会による試掘調査段階では今津所在遺跡と呼称されたものである。
- 3 報告書の作成は、前年度に刊行した福岡遺跡（1区～5区）に準じ、編集は太田が行った。
- 4 出土遺物の整理・実測・トレス・写真撮影等は、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
- 5 出土遺物・図面等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来淀江町教育委員会へ移管する予定である。
- 6 下記の先生方には、報告書の作成についてご指導・ご協力頂いた。

鳥取大学 教育学部	赤木三郎 教授
名古屋大学 文学部	渡辺 誠 教授
京都産業大学 理学部	山田 治 教授
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	工楽普通 学芸室長
元奈良教育大学教授	鶴倉巳三郎 先生
- 7 現地調査及び報告書作成にあたり下記の方々に指導・助言を頂いた。

岡崎友子	田中弘道	田中精夫	中原 齊	中山和之
長岡充展	根鈴輝雄	牧本哲雄	松田 潔	松本美佐子

（敬称略　五十音順）
- 8 木製品の樹種鑑定は古環境研究所に依頼した。

## 凡　　例

- 1 本報告書における方位は磁北を示す。
- 2 調査区に設定した10mグリッドは、福岡遺跡では北西隅交点、今津塚田遺跡では北東隅交点をもって各グリッドの名称とした。
- 3 遺構記号・遺物記号は次のように表す。

S D : 潟状遺構	S K : 土坑	Pit : ピット	B : 編籠	Po : 土器	S : 石器	W : 木製品
------------	----------	-----------	--------	---------	--------	---------
- 4 遺構抑図中におけるセクション・エレベーションの基準線標高は H = の記号で表記する。
- 5 遺構の切り合い関係について、新旧の不明なものは遺構平面図の輪郭線を破線で表現した。
- 6 土器観察表中の①～④は以下の数値を示す。なお、数値後の※は復元値、△は残存値、◎は推定値を表す。

①口径	②器高	③最大径	④底部径
-----	-----	------	------
- 7 石器実測図中の——は磨面を表す。
- 8 福岡遺跡6区の遺構番号は、前年度調査対象とした1区～5区と区別するため、便宜上601番から付けた。

# 目 次

序文

例言

凡例

目次

## 第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	3

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6

## 第3章 今津塚田遺跡

第1節 遺構	9
1. 土坑 2. 溝	
第2節 遺物	11
1. 土器 2. 石器	
第3節 小結	11

## 第4章 福岡遺跡6区

第1節 遺構	23
1. 土坑 2. 溝	
第2節 遺物	51
1. 土器 2. 木製品 3. 石器 4. 編籠	
第3節 小結	53

## 付 論

福岡遺跡6区出土材の樹種	古環境研究所	64	
福岡遺跡出土のかご類について	名古屋大学文学部	渡辺 賢 教授	66
福岡遺跡から出土したかご類の樹種	元奈良教育大学教授	鴨倉 己三郎 先生	68
福岡遺跡の液体シンチレーション	京都産業大学理学部	山田 治 教授	68

<sup>14</sup>C年代測定について

## 挿図目次

挿図 1	今津塚田・福岡遺跡位置図	4
挿図 2	周辺遺跡分布図	8
挿図 3	今津塚田遺跡基準杭設定図	12
挿図 4	今津塚田遺跡遺構配置図・土層断面図	折り込み
挿図 5	今津塚田遺跡 S K-01・02・03・04・05遺構図	13
挿図 6	今津塚田遺跡 S K-06・07・08・09・10遺構図	14
挿図 7	今津塚田遺跡 S K-11・12・13・14・15・16遺構図	15
挿図 8	今津塚田遺跡 S K-17・18・19・20・21・22遺構図	16
挿図 9	今津塚田遺跡 S K-23・24・25・26・27遺構図	17
挿図10	今津塚田遺跡 S D-01・Pit-1・2・3・4・5・6遺構図	18
挿図11	今津塚田遺跡土器実測図	19
挿図12	今津塚田遺跡石器実測図	20
挿図13	福岡遺跡 6 区基準杭設定図	29
挿図14	福岡遺跡 6 区遺構配置図	30
挿図15	福岡遺跡 1 区・6 区遺構配置図・土層断面図	折り込み
挿図16	福岡遺跡 2 区遺構配置図・土層断面図	折り込み
挿図17	福岡遺跡 6 区 S K-601・602・603・604・605・607遺構図	31
挿図18	福岡遺跡 6 区 S K-606・608・609遺構図	32
挿図19	福岡遺跡 6 区 S K-610・611・612・613・614遺構図	33
挿図20	福岡遺跡 6 区 S K-615・616・617遺構図	34
挿図21	福岡遺跡 6 区 S K-618遺構図	35
挿図22	福岡遺跡 6 区 S K-619・620遺構図	36
挿図23	福岡遺跡 6 区 S K-621・622遺構図	37
挿図24	福岡遺跡 6 区 S K-623・624遺構図	38
挿図25	福岡遺跡 6 区 S K-625・626遺構図	39
挿図26	福岡遺跡 6 区 S K-627・628・629遺構図	40
挿図27	福岡遺跡 6 区 S K-630・631遺構図	41
挿図28	福岡遺跡 6 区 S K-632・633・634遺構図	42
挿図29	福岡遺跡 6 区 S K-635・636・637・638・640遺構図	43
挿図30	福岡遺跡 6 区 S K-639遺構図	44
挿図31	福岡遺跡 6 区 S K-641・642・643遺構図	45
挿図32	福岡遺跡 6 区 S K-644・646・647・648遺構図	46
挿図33	福岡遺跡 6 区 S K-645・Pit-601遺構図	47
挿図34	福岡遺跡 6 区 S D-601・602・603・604遺構図	48
挿図35	福岡遺跡 6 区土器実測図（1）	54
挿図36	福岡遺跡 6 区土器実測図（2）	55
挿図37	福岡遺跡 6 区土器実測図（3）	56
挿図38	福岡遺跡 6 区木製品実測図（1）	57
挿図39	福岡遺跡 6 区木製品実測図（2）	58
挿図40	福岡遺跡 6 区木製品実測図（3）	59

## 挿 表 目 次

挿表 1	今津塚田遺跡土坑一覧表	21
挿表 2	今津塚田遺跡Pit一覧表	21
挿表 3	今津塚田遺跡土器観察表	22
挿表 4	今津塚田遺跡石器一覧表	22
挿表 5	福岡遺跡6区土坑一覧表	49
挿表 6	福岡遺跡6区土器観察表	61
挿表 7	福岡遺跡6区木製品一覧表	62
挿表 8	福岡遺跡6区石器一覧表	63

## 図 版 目 次

### 今津塚田遺跡

図版 1 今津塚田・福岡遺跡周辺遠景

今津塚田・福岡遺跡周辺遠景

今津塚田遺跡調査前

図版 2 調査区全景

土坑群

土層断面

図版 3 SK—01完掘状況・土層断面

SK—04完掘状況・土層断面

図版 4 SK—06完掘状況・土層断面

SK—08完掘状況・土層断面

図版 5 SK—17完掘状況・土層断面

Pit—1～4完掘状況

SD—01完掘状況

図版 6 土器・石器

### 福岡遺跡6区

図版 7 調査区全景

SK—601～609完掘状況

図版 8 SK—610・611・612・618・620完掘状況

SK—617・619・623・630完掘状況

SK—625・626・627・632・634完掘状況

図版 9 SK—606土層断面・遺物出土状況

SK—612土層断面

図版10 SK—618土層断面・遺物出土状況

- S K-619土層断面  
図版11 S K-620土層断面・遺物出土状況  
図版12 S K-621土層断面  
S K-624土層断面  
S K-626土層断面  
S K-627土層断面  
図版13 S K-627遺物出土状況  
S K-628遺物出土状況  
S K-631土層断面・遺物出土状況  
図版14 S K-632土層断面  
S K-634土層断面  
S D-601完掘状況  
図版15 S K-635~648・Pit-601完掘状況  
S K-636~643・Pit-601完掘状況  
S K-644~648完掘状況  
図版16 S K-635完掘状況・土層断面  
S K-637完掘状況  
図版17 S K-637土層断面  
S K-639完掘状況・土層断面・遺物出土状況  
図版18 S K-640完掘状況・土層断面  
S K-641完掘状況・土層断面  
図版19 S K-642完掘状況  
S K-644遺物出土状況  
図版20 S K-645完掘状況・土層断面・遺物出土状況  
図版21 S K-648土層断面・植物遺体検出状況  
S D-603完掘状況  
図版22 土器（1）  
図版23 土器（2）  
図版24 木製品（1）  
図版25 木製品（2）・石器  
図版26 編籠  
図版27 編籠  
図版28 出土材の顕微鏡写真（1）  
図版29 出土材の顕微鏡写真（2）  
図版30 カゴ類の全形  
図版31 カゴ類の部分拡大  
図版32 カゴ類顕微鏡写真

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

今回の調査は、一般国道9号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。建設予定地は、鳥取県米子市の東端（尾高地区）から西伯郡淀江町の東端（今津地区）に至る。今回の調査対象地区は淀江平野の中央部にあたり、古くから条里制が施行された地域として知られている。調査地一帯は、1975年から1980年にかけて圃場整備工事対象地域となり、工事に伴う緊急発掘調査が行われ、その際、条里制の畦畔をはじめ、繩文時代前期の遺物、弥生時代の線刻絵画土器等、多くの貴重な資料が得られ注目を集めた。

今津塚田遺跡・福岡遺跡については、1989年に淀江町教育委員会が道路建設予定地内の試掘調査を行った結果その存在が明らかになったものである。これを受けて、建設省倉吉工事事務所と鳥取県教育委員会が協議し本調査の実施を決定し、財団法人鳥取県教育文化財団が建設省倉吉工事事務所より発掘調査の委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が調査を担当することになった。

## 第2節 発掘調査の経過と方法

今津塚田遺跡の調査範囲については、淀江町教育委員会による試掘調査の結果をもとに鳥取県教育委員会と鳥取県埋蔵文化財センターが協議し、約2,200m<sup>2</sup>を確定し、西部埋蔵文化財調査事務所は、平成4年4月より本調査を開始した。まず、調査区内にトレチングを設定して遺物包含層・掘り下げの深さ等を確認し、調査員立ち会いのもと重機による表土除去を行った。そして、東西に長い調査区の長軸に沿った基準線をもとに、10m単位のグリッドを設定しながら調査を進めた。

福岡遺跡については、平成2年度～3年度にかけて1区～5区（約20,000m<sup>2</sup>）の発掘調査を行い、すでにその報告書をまとめている。その後、1区と2区の間の道路下部分を6区（約570m<sup>2</sup>）とし、平成3年度～4年度に調査を行った。福岡遺跡6区では、前年度までの調査により遺物包含層・掘り下げの深さ等が確認されていたので、まず、調査員立ち会いのもと安全勾配を確保しながら重機による表土除去を行った。そして、湧き水対策として沈砂池を設け、うわ水を水中ポンプで排出した。また、調査区に任意のグリッドを10m毎に設定して調査を進めたが、最終的には画面操作により前年度までのグリッド設定に準じた割り付けを行った。



淀江平野遠景（北西より）

## 調査日誌抄

### 今津塚田遺跡

平成4年度

- 4月3日 作業小屋設置
- 4月6日 BM確認・移動、トレンチ設定、  
調査前全景撮影
- 4月7日 重機稼動開始
- 4月8日 グリッド設定、遺構検出開始
- 4月17日 SK-01~12完掘状況撮影
- 4月27日 調査後地形測量
- 5月2日 地層確認トレンチ設定（断ち割り）
- 5月11日 セスナ機による空撮
- 5月12日 調査後全景撮影、現場片付け

### 福岡遺跡6区

平成3年度

- 12月9日 調査範囲確認、BM確認・移動
  - 12月11日 重機稼動開始
  - 12月13日 遺構検出開始
  - 12月19日 SK-620より編籠出土
  - 12月24日 調査後地形測量・全景撮影
  - 12月26日 現場片付け、場内整備
- 平成4年度
- 5月7日 重機稼動開始
  - 5月12日 BM確認・移動、グリッド設定
  - 5月13日 人力による掘り下げ開始
  - 5月26日 土坑（SK-635）検出
  - 6月9日 遺構掘り下げ終了  
地層確認トレンチ設定（断ち割り）
  - 6月10日 調査後全景撮影
  - 6月11日 烏取大学赤木教授による現地指導
  - 6月12日 調査後地形測量
  - 6月19日 調査区整備



調査参加者

### 第3節 調査体制

調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	西 尾 邑 次
副理事長兼常務理事	坂 田 昭 三
事務局長	若 松 良 雄
財団法人鳥取県教育文化財団	鳥取県埋蔵文化財センター
所長	土井田 繁 治（鳥取県教育委員会文化課長）
次長	山 根 豊 己
庶務係長	中 村 金 一（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）平成3年度
	山 根 夏 男（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）平成4年度
調査指導係長	田 中 弘 道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）

調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所

所 長	永 原 功
主任調査員	太 田 正 康
調査員	佐 藤 隆 文 平成3年度 原 田 雅 弘 西 川 微 仲 田 信 一 平成4年度 志 田 路 平成4年度
調査補助員	山 崎 裕 子 平成4年度 橋 口 友 枝 平成4年度
整理作業員	杉 田 千 津 子 速 藤 和 子 塚 田 文 子 岡 崎 友 子 二 宮 さ り オ 岡 田 千 秋
整理作業参加者	左 藤 博

調査指導 鳥取県埋蔵文化財センター

調査協力 淀江町 淀江町教育委員会

発掘作業参加者（五十音順）

綾木秀子、石倉信子、井上一夫、井上みのり、大塚和子、門脇寿子、河崎健一、川中悦子、国野吉久、越田民代、小原里子、下島利彦、下島ちか江、高見光男、高田 茂、高虫美智恵、田中英雄、種田のり子、田原恭吉、長尾茂、中野兔子、中原浩子、中原八千代、野口里子、野田耕八郎、野田美栄子、橋井静恵、橋本春子、花房幸子、吹野房子、吹野雪乃、前田 進、前田美代子、松原志津枝、松原園子、美柑志真子、湊 縫子、渡辺さち子、渡辺達子、渡辺麗子、渡辺幸子、山下嬉志子、山名佐智子、山根和美、山本たづ子、吉田 繁、吉田一子

整理作業員（五十音順）

伊藤恵美子、福垣美智恵、表 明美、清水房子、田中和子、中原千恵、西垣吟枝、野崎悦子、福田延子、福田弥千代、藤原秀子、松岡朋子、松本美佐子、山本清子、山本久美恵

## 第2章 位置と環境

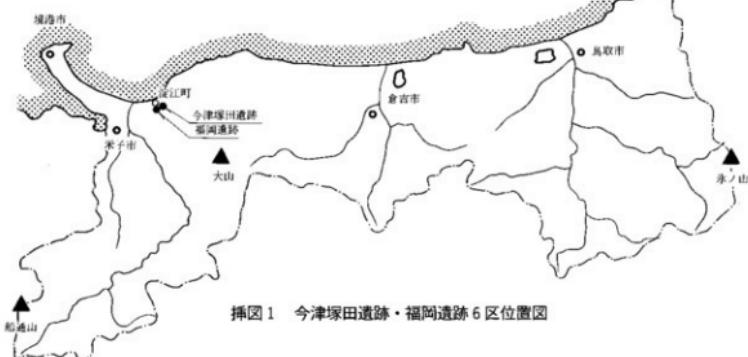
### 第1節 地理的環境

#### 鳥取県

今津塚田遺跡・福岡遺跡は鳥取県西伯郡淀江町に所在する。鳥取県は山陰地方の東部に位置し、東経133度08分～134度30分、北緯35度03分～35度38分を占める。北は日本海に面し、南には白山火山群をなす中国山地が連なり、17座もの1,000メートルを越える高山が県境を分けている。西は船通山と三国山で島根県との境をなし、道後山によって広島県と分けられる。南は花見山・二子山・毛無山・金ヶ山・三平山・蒜山高原・津黒山・田代山・三国山で岡山県と境し、東は三宝山・水ノ山・扇ノ山・牛ヶ峰山によって兵庫県と分けられている。県域は、東西126km、南北61.85km、総面積3,492.69km<sup>2</sup>で全国第41位という小さな県であり、日本全体の1%に過ぎない。その上、県土の75%は林野が占めている。人口は61万4,210人、人口密度は176.1人/km<sup>2</sup>で全国比55%であり、年々低下する人口の自然増加率や若年層の向都離村という問題を抱えているが、平成3年度の豊かさを指数全国1位が示す通り、生活環境は大変恵まれているといえる。鳥取県は大きく東部・中部・西部に分けられ、それぞれの地域に代表的な河川が流れている。そして、その流域に広がる沖積平原に都市が発達している。東部を流れる千代川は、流程57km、56の中小河川を集め、1,192.6km<sup>2</sup>の流域を潤し、その下流に鳥取市を抱く。中部を流れる天神川は、延長32km、流域面積500.5km<sup>2</sup>で、30の細流を集めて北条町から日本海に注ぐ。その中流域に倉吉市が発達する。西部の日野川は延長80kmに及び、流域面積は862.6km<sup>2</sup>、47の河川を伴わせて美保湾に注ぎ、その豊かな水量で米子市を育む。また、日野川の運搬・堆積作用によって形成された、米子市から北西に長く伸びる弓ヶ浜半島の先端部に、全国第3位の漁獲水揚げ量を誇る境港を有する境港市がある。鳥取県はこの4市を中心とした31町4村で構成される。県庁は鳥取市に所在する。

#### 淀江町

淀江町は鳥取県の北西部に位置し、米子市と大山町に隣接する。東西8.2km、南北6.1km、面積25.86km<sup>2</sup>で、北は島根・弓ヶ浜両半島が雄大に広がる美保湾に面し、南は標高1,711m、中高地地方随一の高峰大山を望む風光明媚な町である。また、環境庁名水100選に指定された「天の真名井」、因伯の名水「本宮の泉」に代表される天然の湧水が豊富なことでも有名で、自然の豊か



挿図1 今津塚田遺跡・福岡遺跡 6区位置図

さを物語っている。人口は9,233人、人口密度は356人／km<sup>2</sup>で県平均の2倍強に達し、今後も米子市のベッドタウンとして人口の大幅増加が予想される。地形を見ると、南には中国山地に連なる山々が分布し、大山町との境界には標高751.4mの孝霊山が屹立する。また、町西部の平野中に標高113.7mの壹瓶山が孤立している。これらの山々の山麓には、宇田川水系の作用によって段丘が発達しており、福岡・高井谷・中西尾・福井付近で確認することができる。段丘に続くかたちで、北には扇状地が張り出し、東方大山町の阿弥陀川扇状地の延長をなす福岡扇状地と天井川流域の稲吉扇状地がある。更に北は、デルタ地帯となって冲積平野が形成され、淀江平野となっている。一方、町の西部には、大山の元谷の奥に源を発する延長20.1kmの佐陀川が流れ、その下流に日野川によるものと複合した広大なデルタ地帯を形成して、箕面屋平野となっている。海岸線から内陸部に向かって200~600mの範囲には砂州が発達し、砂丘地となっている。この砂州は主に佐陀川・日野川から運搬された砂礫が堆積したもので、日本有数の砂州である弓ヶ浜砂州の東端をなしている。人々の主たる居住域は山地の裾野にある段丘上及び扇状地の扇頂部と砂州部分で、町土の約3割を占めるデルタ地帯は水田地帯となり、のどかな田園風景をかもしだしている。最近では、米作に代わりスイカのハウス栽培や花卉・いちじく・梨などの特産物の栽培や畜産にも力が入れられ、都市近郊型農業への転身が図られている。

淀江町の地質は大山火山の多大な影響を受けており、鮮新世以降の比較的新しい時代の火山岩や火山碎屑岩がその大部分を占める。大山火山活動以前の基盤となる岩石は、鮮新世の盛んな火山活動によって生産され、壹瓶山や南部山地内の本宮、孝霊山西麓の稲吉から高井谷にかけての丘陵地に分布する両輝石安山岩や角閃石安山岩がこれに当たる。洪積世前期から中期にわたって発達した古期大山は、日本海沿岸まで広大な裸野を広げていると言われており、淀江町では本宮から西尾原にかけて、この時期の火山円錐岩凝灰角砾岩、凝灰砂岩などの火山碎屑岩が分布する。また、大山山麓には大山の火山活動に伴う火山灰が広く飛散しており、本町でも沖積平野・砂州以外の全地域を被覆している。デルタ地帯について見ると、淀江平野は宇田川及びその水系の運搬堆積物で形成され、その表層には最高6~7mの厚さの湖成層・沼沢性堆積物が堆積している。佐陀川流域のデルタは、大山の浸透に伴う安山岩砂礫と日野川水系の花崗岩砂礫から成る。砂州を形成する砂礫は、未風化の新鮮なものである。

#### 今津塚田遺跡

今津塚田遺跡は、鳥取県西伯郡淀江町大字今津に所在する。海岸線から約0.2km内へ入り、JR山陰本線より北へ0.1kmのところに位置し、標高6~8mを測る。また、付近には、弥生時代前期の環濠集落と考えられる今津岸の上遺跡が存在する。

#### 福岡遺跡

福岡遺跡は、鳥取県西伯郡淀江町大字福岡に所在する。海岸線から約1km内へ入った淀江平野のほぼ中央に位置し、標高3~9mを測る。約0.5km南には向山古墳群、約1km南の丘陵地には上淀廬寺が存在する。

## 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 淀江町の歴史は土器の発明使用以前の時代にまで遡ることができる。淀江町小波で黒曜石製のナイフ形石器、中西尾で黒曜石製の有舌尖頭器が出土している。周辺地域では、大山町坊領・莊田、名和町東坪・門前、米子市奈喜良、岸本町久古で、いずれもサヌカイト製の有舌尖頭器が発見されている。これらの石器を含めて、鳥取県内各地で旧石器時代～縄文時代草創期にかけての遺物が出土しているが、現在までのところ遺跡の確認にはいたっていない。

**縄文時代** 淀江町内の縄文時代の代表的な遺跡としては船ヶ口遺跡<sup>(1)</sup>・河原田遺跡<sup>(1)</sup>の2遺跡があげられる。船ヶ口遺跡では、前期に位置付けられる爪形文土器・条痕文土器、九州の曾畠式土器や多数の石器等が出土しており、河原田遺跡では、後期～晚期に位置付く磨消縄文土器・沈縫文土器・無文土器や石器等が出土している。その他に壺瓶山第1遺跡・井手挾遺跡においても縄文時代の土器あるいは遺構が検出されているがまとまった資料にはなっていない。今後周辺遺跡の調査が期待される。

周辺地域をみると、大山町では、大道原・莊田・蔥岡第1・塙田遺跡より早期の押型文土器が出土しており、前期の中高遺跡、後期～晚期の別所遺跡、琰状耳飾りが出土した長田第11遺跡(松尾頭遺跡)が知られている。米子市では、早期の上福万遺跡、早期末～後期の陰田第7遺跡、前期～晚期の久美遺跡に代表される多くの遺跡が確認されている。

**弥生時代** 弥生時代になると確認される遺跡数も増加する。前期の遺跡として、今津岸の上遺跡<sup>(2)</sup>があげられる。最近の発掘調査で、長径約135mと推定されるV字状環濠が検出されており、弥生時代の集落形成を知るうえで貴重である。

中期の遺跡としては、晩田遺跡<sup>(1)</sup>・角田遺跡<sup>(1)</sup>等が知られるが、角田遺跡では発掘調査により線刻絵画土器が発見されており非常に注目される。大型の壺の頸部に、太陽・舟と舟を漕ぐ人・建物2棟・樹木・鹿が描かれ、弥生時代の生活様式を知る大きな手がかりとなる重要な資料である。さらに、弥生時代において、海上交通が文化発展に決定的影响を与えることを考えると、淀江町内でこの絵画土器が出土したことの意味は大きい。

後期の遺跡としては、百塚第1遺跡・楚利遺跡・井手挾遺跡・坂ノ上遺跡等が確認されている。弥生時代の集落遺跡は、今後の調査によりその数がかなり増加するであろう。

**古墳時代** 周辺地域と比較して、淀江町の特殊性があらわるのがこの古墳時代である。淀江町内の丘陵上には数多くの古墳群が存在する。晚田・小枝山・城山・向山・瓶山・稻吉・高井谷・中西尾・西尾原・百塚・壺瓶山・中間・小波古墳群がそれである。

現在確認されている町内最古の古墳は、小枝山古墳群中の上の山古墳<sup>(3)</sup>(中期前半)である。天神垣神社の裏山にあり、円筒埴輪・形象埴輪・葺石・主体部の竪穴式石室2基が確認された。第1石室からは、三角板革縫短甲片・衝角付背片等、第2石室からは、滑石製小匂玉・小玉が500個以上出土しており、石室も現存する貴重な古墳である。中期後半の古墳として向山3号墳・坂ノ上1号墳(中間古墳群)が知られるが、前期～中期の古墳造営については未解明部分が多い。

後期になると、向山古墳群中に向山4号墳・長者ヶ平古墳・岩屋古墳、小枝山古墳群中に小枝山12号墳・石馬谷古墳といった大型前方後円墳が築かれる。長者ヶ平古墳<sup>(4)</sup>では、県内唯一の出土例である金銅製冠や環頭大刀・三輪玉・銅鈴等が発見されている。また、本州唯一の石馬は、石馬谷古墳より出土したという伝承もあり、淀江町における古墳文化の特殊性を示すものである。石馬は、九州の福岡県八女市にある岩戸山古墳でも出土しており、その関連性については今後さらに検討されるであろう。

首長墓として大型前方後円墳が築かれる一方、家族墓の性格を持つ小型古墳が群集墳として営まれ

のも後期の様相である。上述した古墳群の調査が進めば、群集墳を造営した各集落の相関等、その実態が明らかになるであろう。

古墳時代の集落遺跡をあげると、前期は百塚第1遺跡・手井手挾遺跡、中期は百塚第1遺跡・百塚第4遺跡・百塚第5遺跡・百塚第6遺跡、後期は福頼遺跡・百塚第1遺跡・百塚第4遺跡・百塚第5遺跡等が確認されている。

**歴史時代** 大宝律令の制定により、地方は国・郡・里的行政単位に分けられた。鳥取県中・西部地域は伯の国となり、河村・久米・八幡・宍戸・会見・日野の六郡が置かれ、淀江地区は宍戸郡内の新井郷に編成された。隣接する会見郡の郡衙は、岸本町の長者屋敷遺跡であると推定されているが、宍戸郡の郡衙跡は未だ確認されていない。

この制度と共に条里制が敷かれ、土地整理が行われている。淀江平野では、昭和50年～55年の発掘調査<sup>(9)(10)</sup>により、水田下から石列・杭列・畦畔等の土地区画の痕跡が発見されている。また、平成3年度の井手脚遺跡調査の際にも、東西方向に走る2列の杭列が確認された。

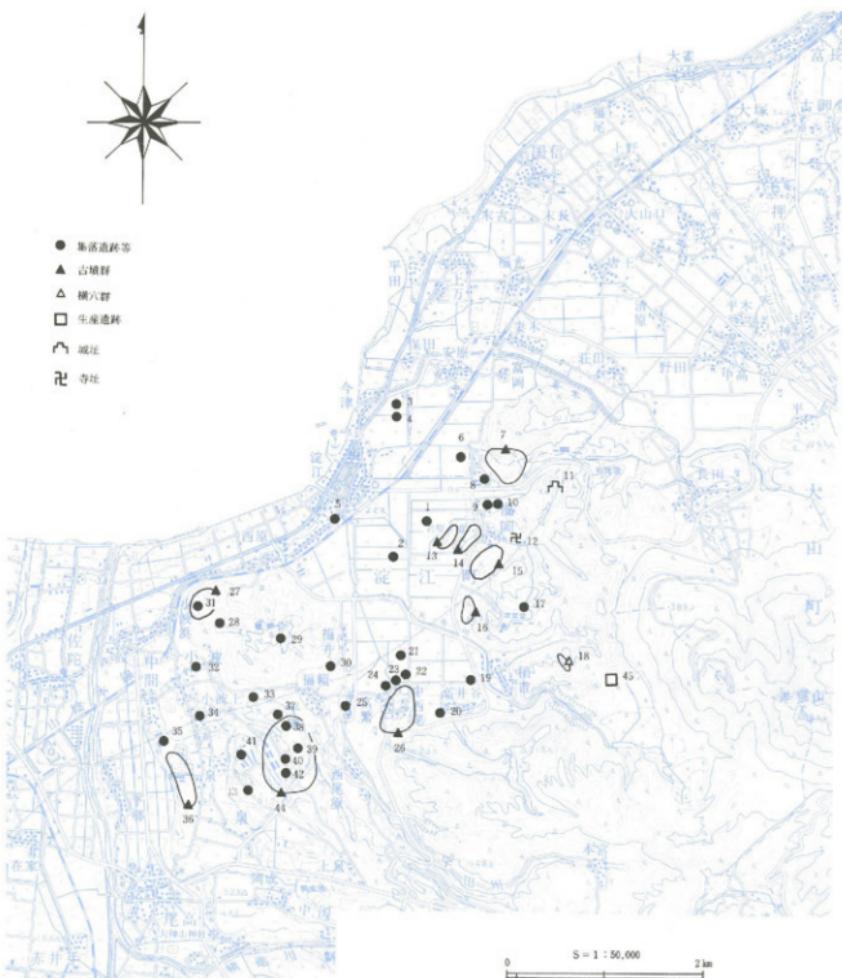
白鳳時代になると、鳥取県の各地に寺院が建立されるようになり、淀江では上淀庵寺が建てられた。同寺跡からは「神将」「菩薩像」などを描いた彩色壁画が発見され、法隆寺と並ぶ日本最古級の寺院壁画として注目を集めだが、その表現方法が法隆寺のそれとは異なり、先に出土した新羅系の「單弁十二葉蓮華文」様式の軒丸瓦や珍しい二重構造の瓦積基壇とも併せて、畿内とは異なる独自の文化圏の形成や朝鮮半島との直接交流といった新たな見解も発表された。また、近くの鍛冶場跡と考えられる楚利遺跡からは布目瓦・鶲尾片などが見つかっており、同寺との関係が注目される。

前述した淀江条里地域は「三世一身の法」「豊田永年私財法」を経て、莊園へと移行していく。「日吉神社聖真子宮碑岸所下文案」<sup>(11)</sup>（1168）によると、保元年中（1156～1158）及び長寛元年（1163）に、近江の日吉社に寄進させ「宇多河庄」と称する莊園になっている。次いで建久2年（1191）に、田3町が大山寺に永代寄進されたことが『大山寺縁起』<sup>(12)</sup>に記され、更に建保2年（1214）には「昆舎門堂記録」<sup>(13)</sup>・「平觀範置文」<sup>(14)</sup>に「宇多河東庄」の名が出現し、東西二庄への分裂を示すなど、条里地域が時代の流れの中で様々に変容していく様子を窺い知ることができる。

南北朝から室町・戦国時代にかけては、全国で群雄割拠する争乱の時代であるが、淀江もその例外ではなかった。1333年に起こった名和長年と隱岐守護佐々木清高の小波城の攻防戦を皮切りに、尼子経久軍が山名氏を攻めて淀江城を陥落させた1524年の「大永の五月崩れ」、1569年の毛利氏と尼子氏による淀江城・稻吉城を巡る争い、1585年の福頼氏と南条氏による香原山城の争奪戦など、長い間混亂の中に置かれていた。これらの争いの舞台となった城は、砦の様なものと考えられているが、未だ正確な位置は特定できおらず、今後の調査・研究を待たねばならない。

## 註

- (1)『宇田川』 淀江町教育委員会 1981
- (2)『淀江町内遺跡発掘調査報告書II』 淀江町埋蔵文化財調査報告書第18集 淀江町教育委員会 1990
- (3)『淀江町誌』 淀江町 1985
- (4)『向山古墳群』 淀江町埋蔵文化財発掘調査報告書17集 淀江町教育委員会 1990
- (5)『淀江条里遺構地域緊急調査報告書』 淀江町教育委員会 1976
- (6)『淀江の条里』 淀江町教育委員会 1978
- (7)『鳥取県史2』 所収 鳥取県 1973
- (8) 塙 保己一編 「群書類從」所収 1819～1822
- (9) 清水正健編 「莊園志料」所収 1933
- (10) 竹内理三編 「鎌倉遺文」所収 1971



插図2 周辺遺跡分布図

## 第3章 今津塚田遺跡

### 第1節 遺構

今津塚田遺跡の調査では、土坑27、溝1、ピット6を検出した。遺構の性格についてははっきりしないが、以下、それらの代表的なものについて記述する。

#### 1 土坑

##### S K-01 (挿図5 図版3)

位置 C4グリッド中央部に位置し、坑底標高6.50mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(2.68×1.55-0.33m)で、底面には凹凸がある。

土層 埋土は①～③層で、砂混じりの粘質土である。

##### S K-02 (挿図5)

位置 C4グリッド東部に位置し、坑底標高6.68mを測る。

形態 平面形、底面形は楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(0.99×0.85-0.18m)で、底面には凹凸がある。

土層 埋土は①～③層で、砂混じりの粘質土である。

##### S K-03 (挿図5)

位置 C4グリッド南東部に位置し、坑底標高6.63mを測る。

形態 平面形、底面形は不定形で、断面形は皿状を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(1.06×0.68-0.23m)で、底面はほぼ平坦である。

土層 埋土は①・②層で、砂混じりの粘質土である。

##### S K-04 (挿図5 図版3)

位置 C4グリッド南部に位置し、坑底標高6.63mを測る。

形態 一部擾乱を受けているが、平面形、底面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(1.58×0.81-0.21m)で、底面はほぼ平坦である。

土層 埋土は①～③層で、砂混じりの粘質土である。

##### S K-05 (挿図5)

位置 C5グリッド北部に位置し、坑底標高6.60mを測る。

形態 平面形、底面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(1.07×0.83-0.28m)で、底面は平坦である。

土層 埋土は①～③層で、砂混じりの粘質土である。

##### S K-06 (挿図6 図版4)

位置 C5グリッド北西部に位置し、坑底標高6.68mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(3.10×0.87-0.19m)で、底面には若干の凹凸がみられる。

土層 埋土は①～③層で、砂混じりの粘質土である。

##### S K-08 (挿図6 図版4)

位置 B5グリッド北西隅に位置し、坑底標高6.63mを測る。

形態 平面形は鶴丸長方形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(2.11×1.37-0.23m)で、底面には若干の凹凸がある。

**土 層** 埋土は①～③層で、砂混じりの粘質土である。

**S K-09** (挿図6)

**位 置** B 5 グリッド北部に位置し、坑底標高6.48mを測る。

**形 態** 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(1.30×1.10-0.32m)で、底面には若干の凹凸がみられる。

**土 層** 埋土は①～③層で、砂混じりの粘質土である。

**S K-10** (挿図6)

**位 置** B 5 グリッド北東部に位置し、坑底標高6.64mを測る。

**形 態** 平面形、底面形は楕円形で、断面形は椀状を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(0.91×0.73-0.22m)で、底面はほぼ平坦である。

**土 層** 埋土は①・②層で、砂混じりの粘質土である。

**S K-12** (挿図7)

**位 置** B 5 グリッド中央部に位置し、坑底標高6.63mを測る。

**形 態** 平面形、底面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(1.08×0.85-0.20m)で、底面はほぼ平坦である。

**土 層** 埋土は①層で、砂混じりの粘質土である。

**遺 物** 土師器胸部片が出土した。

**時 期** 出土遺物より古墳時代と考える。

**S K-16** (挿図7)

**位 置** B 6 グリッド中央部に位置し、坑底標高6.69mを測る。

**形 態** 平面形は円形で、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(0.80×0.60-0.22m)で、底面は二段になる。

**土 层** 埋土は①層で、砂混じりの粘質土である。

**S K-17** (挿図8 図版5)

**位 置** B 7 グリッド中央部に位置し、坑底標高6.43mを測る。

**形 態** 平面形は円形で、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(1.25×1.10-0.45m)で、底面には凹凸が目立つ。

**土 层** 埋土は①・②層で、砂混じりの粘質土である。

**S K-21** (挿図8)

**位 置** B 7 グリッド中央部に位置し、坑底標高6.73mを測る。

**形 態** 平面形は不定形、底面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(1.25×0.97-0.16m)で、底面はほぼ平坦である。

**土 层** 埋土は①層で、砂混じりの粘質土である。

**S K-23** (挿図9)

**位 置** B 8 グリッド北部に位置し、坑底標高6.72mを測る。

**形 態** 平面形、底面形は楕円形で、断面形は逆梯形を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(0.65×0.55-0.25m)で、底面は平坦である。

**土 层** 埋土は①層で、砂混じりの粘質土である。

**S K-25** (挿図9)

**位 置** B 8 グリッド中央部に位置し、坑底標高6.77mを測る。

**形 態** 平面形、底面形は楕円形で、断面形は逆梯形を呈する。壁の立ち上がりは外傾し、検出面での規模は(0.83×0.37-0.15m)で、底面はほぼ平坦である。

土層 埋土は①層で、砂混じりの粘質土である。

## 2 溝

### S D-01 (挿図10 図版5)

位置 C 1 グリッド東部より同グリッド北西部にかけて検出した。検出面標高は6.20～6.30mで、調査区の北西隅に位置する。

形態 溝は蛇行するが、走向はN-60°-Wの方向である。検出規模は、全長5.64m、幅0.68～1.64m、深さ0.12～0.15mを測る。断面形は皿状を呈する。

土層 埋土は①層で、砂混じりの粘質土である。

性格 形態的特徴から自然小河川と考える。

### 3 ピット (挿図10 図版5)

C 1 グリッドの南東部でPit 1～Pit 4を、B 6 グリッドの北東部でPit 5・6 検出した。径は40～70cm、深さは8～18cm程度とばらつきがある。性格は不明である。

## 第2節 遺物

今津塚田遺跡の調査に伴い古墳時代以降の土器・石器が少量ながら出土した。以下、それらについて記述する。

### 1 土器 (挿図11 図版6)

須恵器

Po 1・2は6C後半の环身である。Po 1の立ち上がりは内湾し端部は丸く、外面底部にはヘラケズりが残る。

Po 3～Po 5は壺胴部片で、いずれも外面に格子ふうタタキ、内面に同心円文タタキが認められる。また、Po 4・5の外面には粗いカキメ調整が施される。Po 6は不明土器である。口縁下に3条の沈線を引き、1条目と2条目の間に刺突を施し、口縁端部を平坦に仕上げる。

土師質土器

Po 7は、口縁部がくの字状に外反し口唇部は肥厚する。

陶磁器

Po 8・9は室町時代の備前焼鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は肥厚し端部は平坦である。

Po 9の端部は上方にのび広い平坦面をもつ。Po 10は内外面施釉する。内面には粘土痕がはっきり残る。

### 2 石器 (挿図12 図版6)

S 1～S 3は磨石でS 4は用途不明である。

S 1は、長細の形状で上下面に磨面が認められる。S 2は、平面形が正方形に近く、上面と片側側面に磨面が存在する。S 3は、偏平な円錐でその上面が磨面である。S 4については、明瞭な使用痕は確認できないが、その形態から磨石の可能性も考えられる。

## 第3節 小結

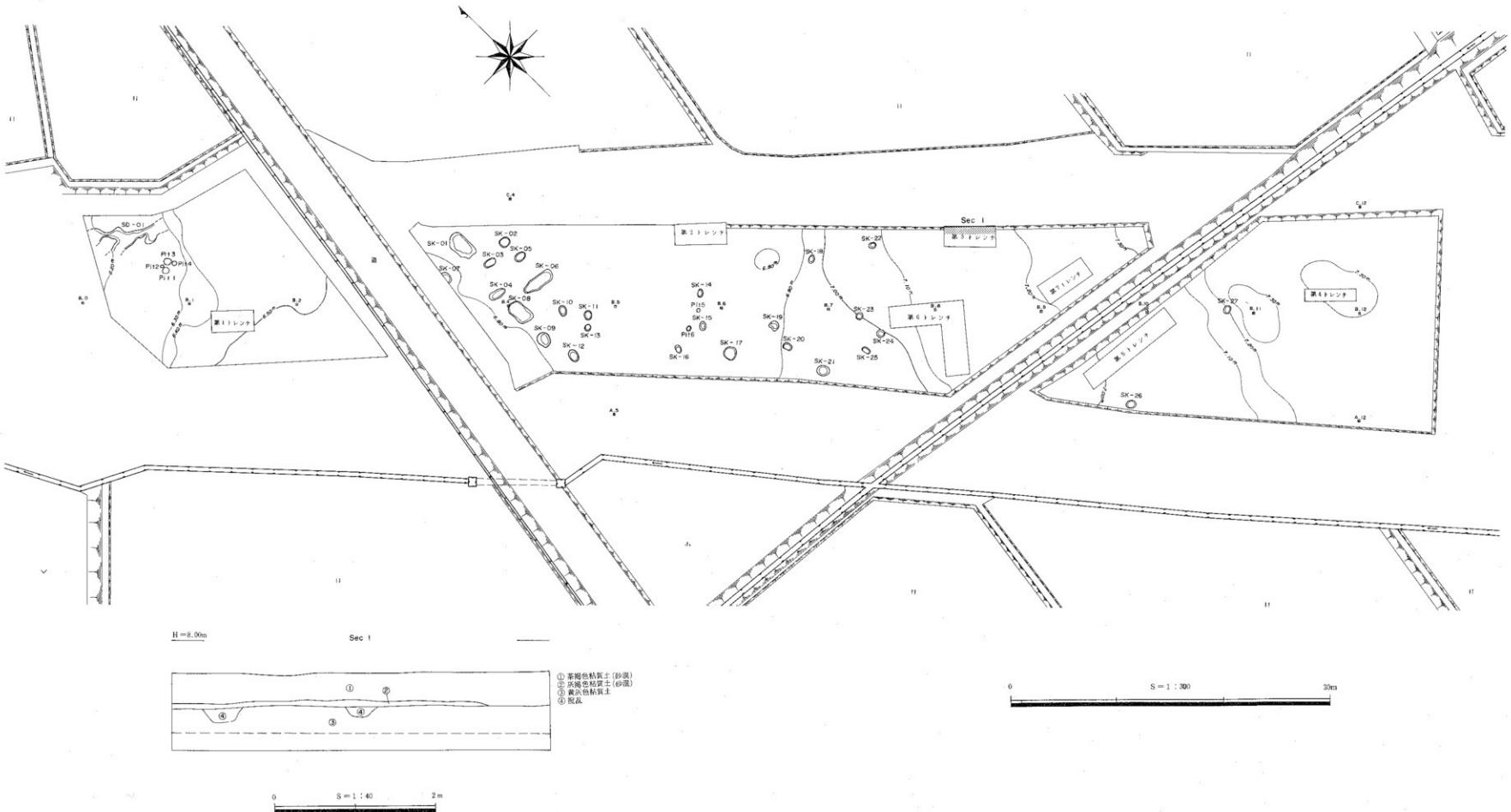
今津塚田遺跡の発掘調査によって確認した遺構・遺物を概観してまとめとする。

遺構 土坑27、溝1、ピット6を検出した。溝は、その形態的特徴から自然小河川と考えられるが、土坑とピットについては性格不明である。各遺構の時期についても、遺構内出土遺物がSK-12の土師器片1点のみであるため残念ながら言及できない。

遺物 出土遺物はごく少量であった。古墳時代以降の土器（須恵器・土師質土器・陶磁器）と石器が4点である。現地は圃場整備の際にかなり削平され遺物を失っているのであろう。



挿図3 今津塚田遺跡基準杭設定図



挿図4 今津塚田遺跡遺構配置図・土層断面図

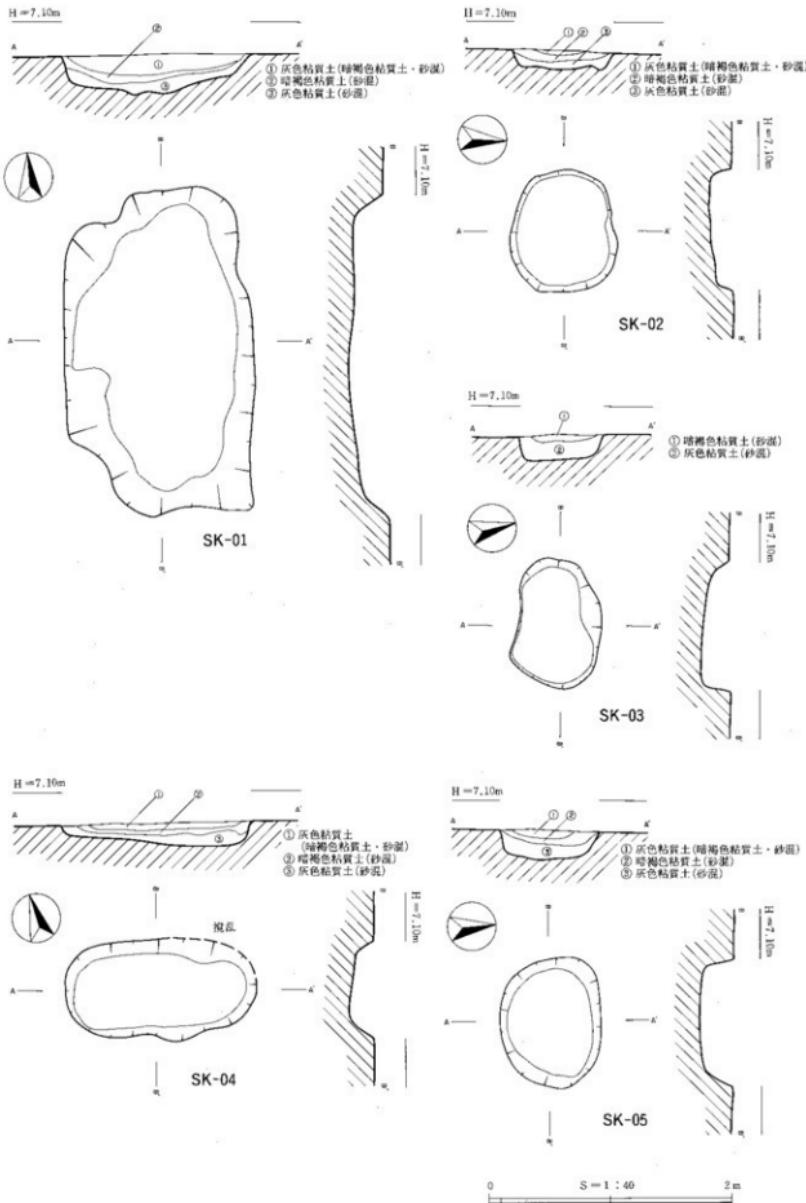
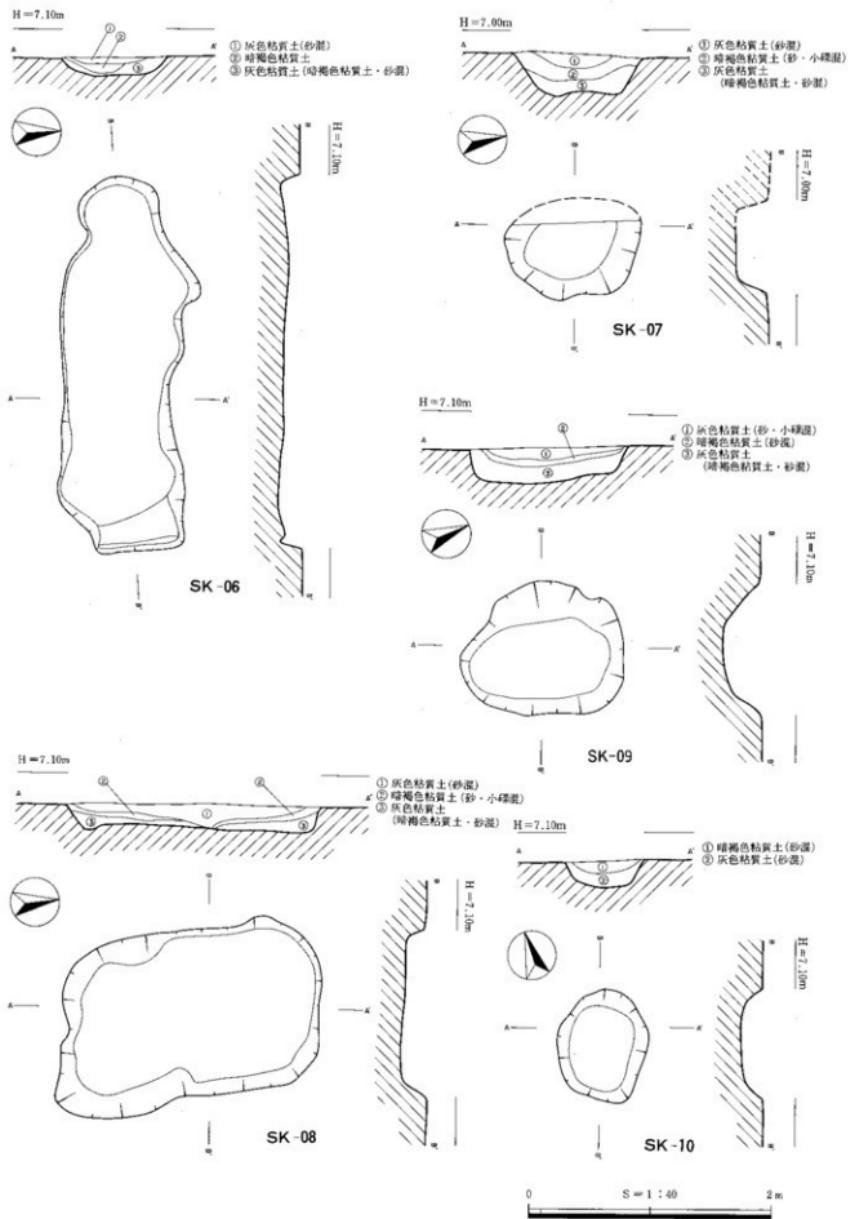
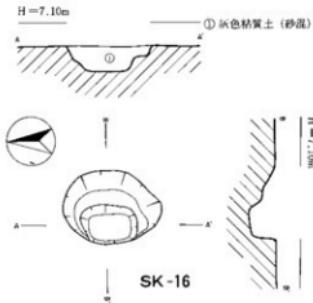
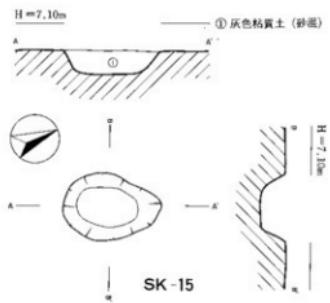
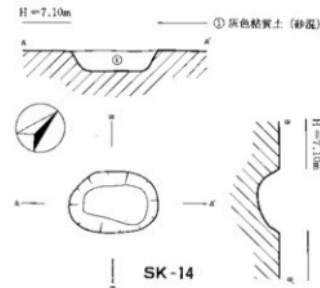
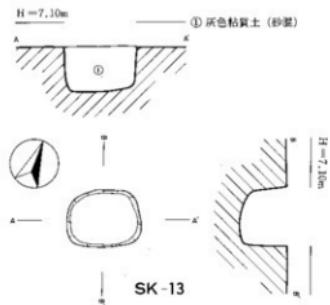
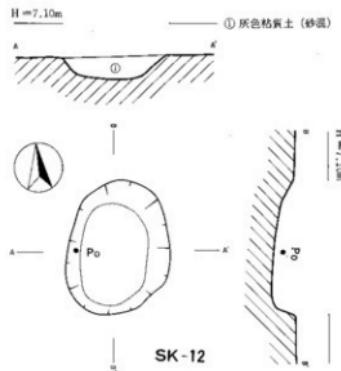
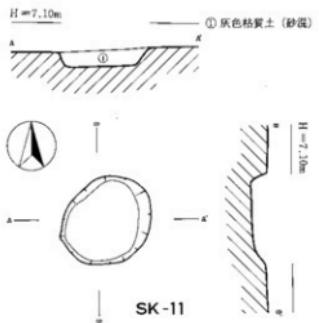


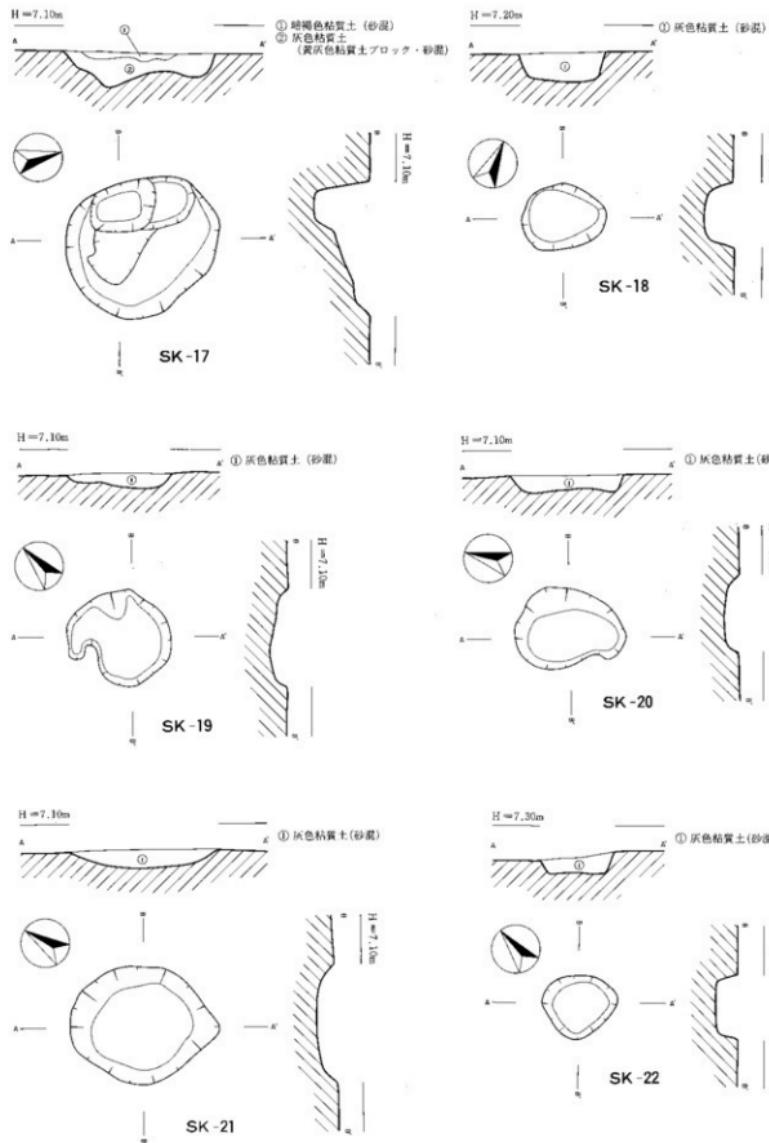
図5 今津塚田遺跡SK-01・02・03・04・05遺構図



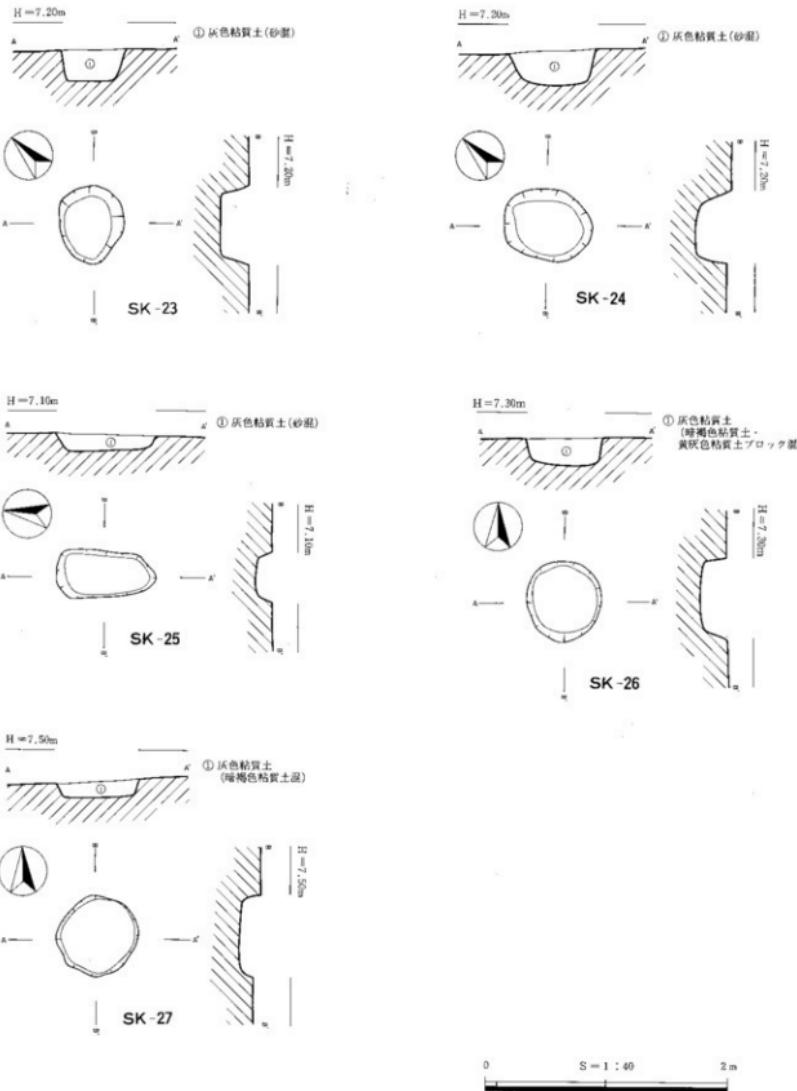
插図 6 今津塚田遺跡 SK-06・07・08・09・10 遺構図



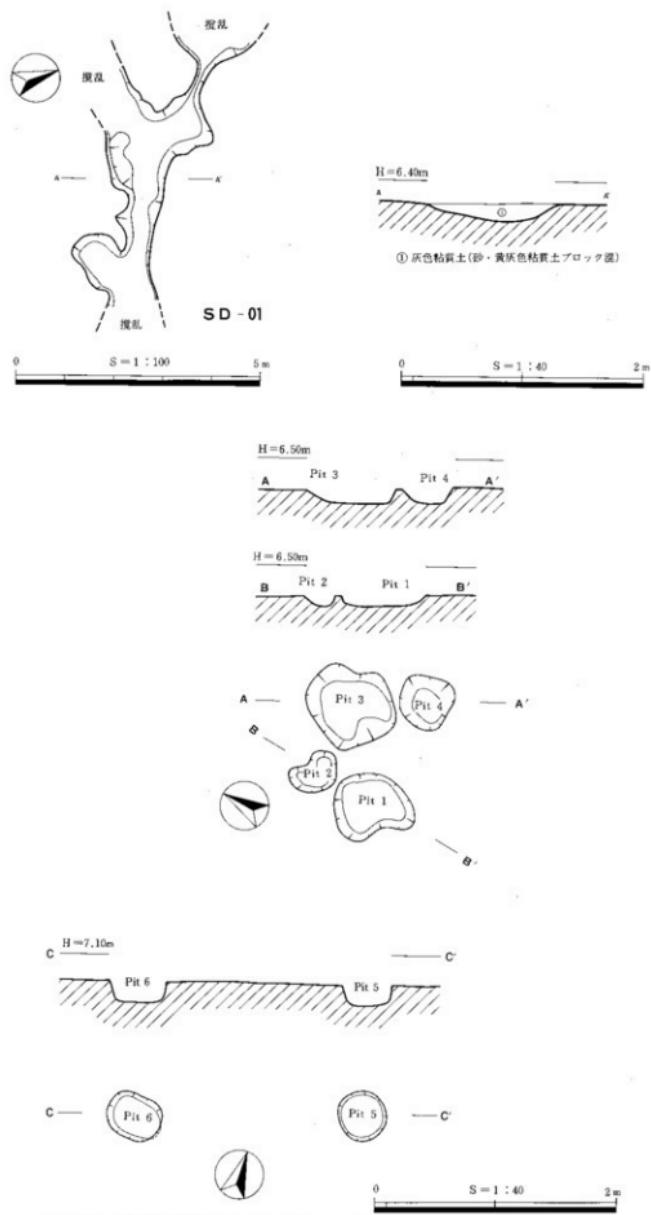
挿図7 今津塚田遺跡 SK-11・12・13・14・15・16遺構図



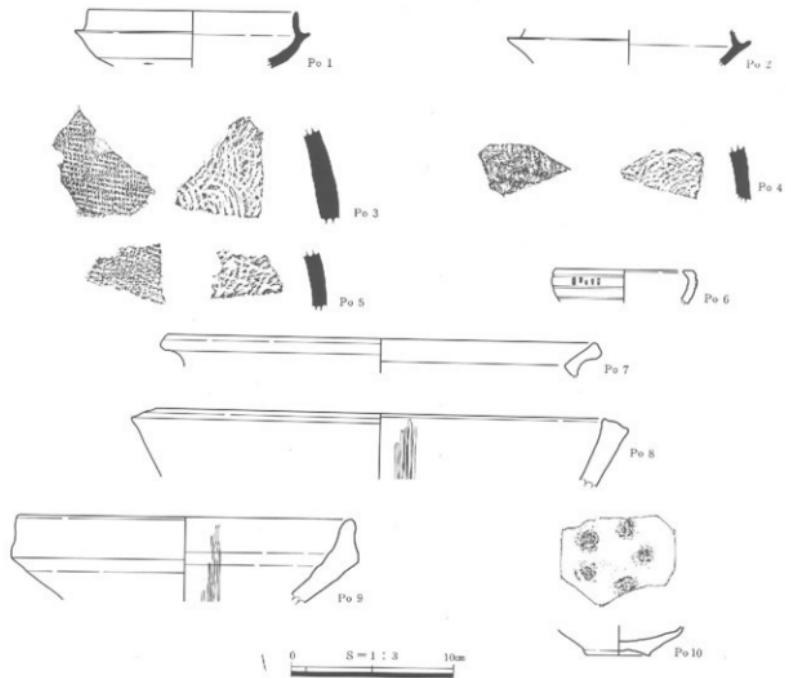
挿図8 今津塚田遺跡SK-17・18・19・20・21・22遺構図



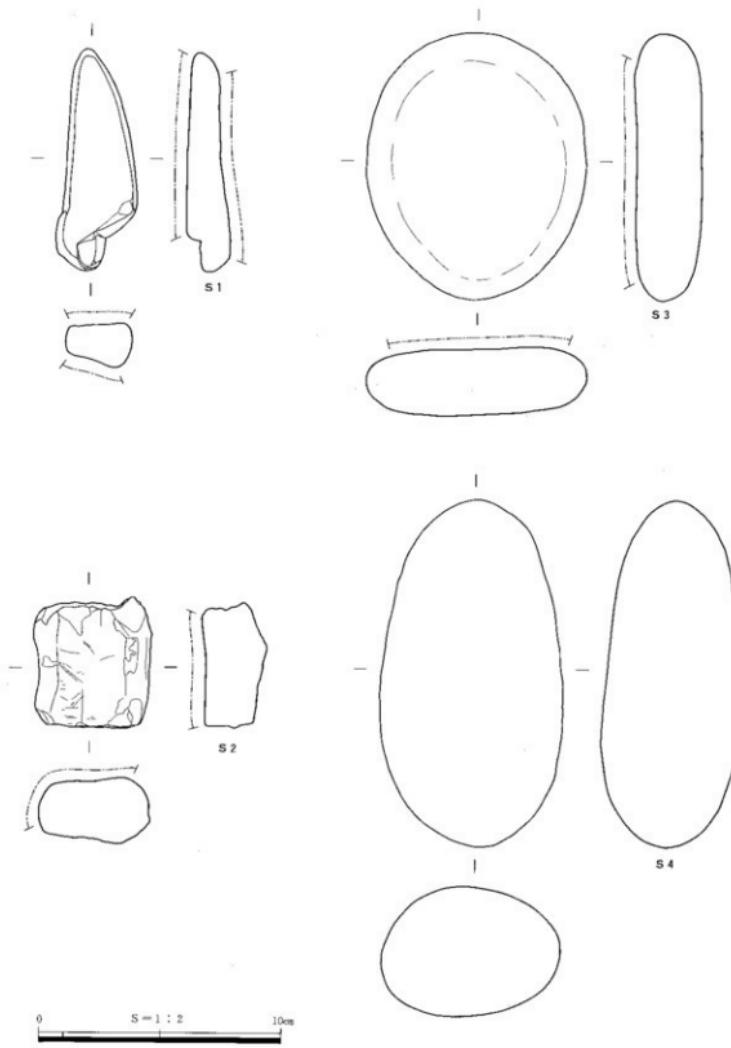
挿図9 今津塚田遺跡SK-23・24・25・26・27遺構図



挿図10 今津塚田遺跡 S D-01・Pit-1・2・3・4・5・6 遺構図



挿図11 今津塚田遺跡土器実測図



插図12 今津塚田遺跡石器実測図

挿表1 今津塚田遺跡土坑一覧表

遺構	挿図	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深m)	坑底標高(m)
SK-01	5	3	C4	不定形	外傾	2.68×1.55-0.33	6.50
SK-02	5		C4	楕円形	外傾	0.99×0.85-0.18	6.68
SK-03	5		C4	不定形	外傾	1.06×0.68-0.23	6.63
SK-04	5	3	C4	楕円形	外傾	1.58×0.81-0.21	6.63
SK-05	5		C5	楕円形	外傾	1.07×0.83-0.28	6.60
SK-06	6	4	C5	不定形	外傾	3.10×0.87-0.19	6.68
SK-07	6		C4	不定形	外傾	1.08×(0.60)-0.36	6.45
SK-08	6	4	B5	楕丸長方形	外傾	2.11×1.37-0.23	6.63
SK-09	6		B5	不定形	外傾	1.30×1.10-0.32	6.48
SK-10	6		B5	楕円形	外傾	0.91×0.73-0.22	6.64
SK-11	7		B5	円形	外傾	0.72×0.72-0.12	6.73
SK-12	7		B5	楕円形	外傾	1.08×0.85-0.20	6.63
SK-13	7		B5	円形	外傾	0.60×0.46-0.38	6.50
SK-14	7		C6	円形	外傾	0.73×0.52-0.18	6.69
SK-15	7		B6	円形	外傾	0.81×0.56-0.22	6.67
SK-16	7		B6	円形	外傾	0.80×0.60-0.22	6.69
SK-17	8	5	B7	円形	外傾	1.25×1.10-0.45	6.43
SK-18	8		C7	楕円形	外傾	0.70×0.54-0.24	6.72
SK-19	8		B7	不定形	外傾	0.85×0.81-0.15	6.76
SK-20	8		B7	不定形	外傾	0.82×0.65-0.15	6.74
SK-21	8		B7	不定形	外傾	1.25×0.97-0.16	6.73
SK-22	8		C8	不定形	外傾	0.65×0.53-0.18	6.70
SK-23	9		B8	楕円形	外傾	0.65×0.55-0.25	6.72
SK-24	9		B8	円形	外傾	0.73×0.58-0.28	6.70
SK-25	9		B8	楕円形	外傾	0.83×0.37-0.15	6.77
SK-26	9		B10	円形	外傾	0.66×0.62-0.21	6.87
SK-27	9		C11	円形	外傾	0.68×0.66-0.14	7.10

挿表2 今津塚田遺跡・Pit一覧表

遺構	挿図	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深m)	坑底標高(m)
Pit-1	10	5	C1	不定形	外傾	0.69×0.61-0.10	6.13
Pit-2	10	5	C1	不定形	外傾	0.39×0.26-0.08	6.13
Pit-3	10	5	C1	不定形	外傾	0.72×0.61-0.12	6.16
Pit-4	10	5	C1	不定形	外傾	0.45×0.44-0.14	6.16
Pit-5	10		B6	円形	外傾	0.42×0.41-0.15	6.70
Pit-6	10		B6	楕円形	外傾	0.46×0.37-0.18	6.70

插表3 今津塚田遺跡土器觀察表

①口径②器高③最大径④底部径 ※復元値 △残存値

遺物番号 測定番号 測定番号	取上番号	出土位置	器種	法面 (m)	形態	手 法	胎 土	機成色	備考
Po 1 11 6	18	B 8	环身	①12.8m ②3.5m	立ち上がりは内窓、端部は丸い	外周底左方向のへき削り。	泥。砂粒少 量含む	良好	内外面暗 灰色
Po 2 11 6	2	トレンチ 1	环身	①15.0m ②2.1m	立ち上がりは内窓削除で端部を 尖らせる。		泥。砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色
Po 3 11 6	4	トレンチ 3	甌			外周格子ふうタクキ。内面同心 円文タクキ。	泥。砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色
Po 4 11 6	19	B10	甌			外周格子ふうタクキ後あらいか キメ調整。内面同心円文タクキ。	泥	良好	内面灰色 外周灰黃 褐色
Po 5 11 6	17	C 8	甌			外周格子ふうタクキ後あらいか キメ調整。内面同心円文タクキ。	泥	良好	内外面灰 色
Po 6 11	29	B11	不明	①16.6m ②2.1m	口縁下に3つの枕頭をつき化粧 縁は斜方で削す。口縁部は内窓 し、端部は平頭である。	内外面ナガ調整。	泥。1mmの 砂粒含む	良好	内外面灰 色
Po 7 11	19	B10	甌	①25.5m ②2.1m	口縁はくの字状に外反し、口縁 部は削除する。端部は平頭である。	内外面ナガ調整。	やや粗。1 ~2mmの石 英砂粒含む	良好	内外面帶 灰色 外周スッペ ル
Po 8 11 6	3	トレンチ 2	環鉢	①27.9m ②4.3m	口縁は内面削除に立ち上がり、 口縁部は削除する。端部は平頭で ある。内面の放射状脊椎と条縫 の数は5本以上である。	内外面ナガ調整。	泥。1mm以 下の砂粒	良好	内面赤灰 色外周に 並い赤褐 色
Po 9 11 6	25	トレンチ 7	環鉢	①29.5m ②5.3m	口縁は内面削除に立ち上がり、 口縁部は削除する。端部は上方 にのび、平坦面を広くもつ。内 面の放射状脊椎と条縫の数は4 本である。	内外面ナガ調整。	泥。1~2 mmの砂粒含 む	良好	内外面灰 色
Po10 11 6	11	B 4	板	②1.6m ④0.8m	内面に粘土膜あり	内外面無釉。	泥。1mm厚 度の砂粒含 む	良好	内外面青 褐色

插表4 今津塚田遺跡石器一覧表

遺物番号	標記番号	回版番号	取上番号	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(kg)	特 質	器種
S1	12	6	25	トレンチ 7	9.1	2.7	1.8	70	形状は長椭く、上下面に磨面が認められる。	磨石
S2	12	6	16	C 7	5.4	4.6	2.7	120	平面形は正方形に近く、上面と片側の側面に磨 面が認められる。	磨石
S3	12	6	25	トレンチ 7	11.0	9.0	2.7	440	平面内斜、断面黄緑い橢円形である。 上更磨面。	磨石
S4	12	6	3	トレンチ 2	14.3	7.3	5.5	790	平面橢円形、断面卵形を呈す 使用痕は確認できない。	磨石

## 第4章 福岡遺跡6区

### 第1節 遺構

福岡遺跡6区の発掘調査により、土坑48、溝4、ピット1を検出した。以下、それらの代表的なものについて記述する。

#### 1 土坑

SK-601～648のうち、土器を伴い時期の判明した土坑はすべて弥生時代前期である。6区に隣接する福岡遺跡1・2区（平成2年度調査）では、弥生時代前期の土坑は1区で確認された3基のみで、ほとんど弥生時代中期・古墳時代のものであった。これからすると、弥生時代前期の土坑群は1区～6区、弥生時代中期・古墳時代の土坑群は2区を中心存在している。土坑の性格については、平面形・底面形・断面形の形態的特徴、埋土の不自然な堆積状況、当時の地山の粘質土が埋土中にブロック状に混じること、出土木製品の中に掘削具と思われるものが含まれること等から、粘土探掘坑と考える。

##### SK-601 (挿図17 図版7)

位置 A13グリッド北東部に位置し、坑底標高2.48mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。特に平面形がいびつである。壁の立ち上がりは、一部で直立し大部分は内傾する。検出面での規模は(1.50×1.13-0.35m)で、底面には若干の凹凸がある。

土層 埋土は①層で、灰色粘質土がブロック状に混じる。

##### SK-604 (挿図17・35 図版7・22)

位置 A13グリッド中央部に位置し、坑底標高2.50mを測る。

形態 平面形は梢円形、底面形、断面形は不定形である。特に底面形がいびつである。壁の立ち上がりは、一部で内傾し大部分は外傾する。検出面での規模は(0.76×0.55-0.30m)で、底面には凹凸が目立つ。

土層 埋土は①・②層で、②層には灰色粘質土がブロック状に混じる。

遺物 麦片が出土し、SK-606出土のPo6と接合した。

時期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

##### SK-606 (挿図18・35・36 図版7・9・22・23)

位置 A13グリッド東部に位置し、坑底標高2.47mを測る。

形態 平面形、底面形は不定形、断面形は椀状を呈する。壁の立ち上がりは、北側で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.30×1.13-0.32m)で、底面はほぼ平坦である。

土層 埋土は①・②層で、②層には灰褐色粘質土がブロック状に混じる。

遺物 壕Po6、底部Po18が出土した。Po6はSK-604出土の甕片と、Po18はSK-608出土の底部片と接合した。

時期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

##### SK-608 (挿図18・36 図版7・23)

位置 A12グリッド南部に位置し、SK-609と接する。坑底標高2.45mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、南側と北西側の一部で直立し他は外傾する。検出面での規模は(1.46×1.26-0.33m)で、底面には凹凸がある。

土層 埋土は①～④層で、②層には茶褐色粘質土が、③層には灰色粘質土・茶褐色粘質土がブロック状に混じる。

遺物 底部Po12・Po18が出土した。Po12はSK-634出土の底部片、Po18はSK-606出土の底部片と接合

した。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K -612 (挿図19 図版8・9)

位 置 B13グリッド南西部に位置し、坑底標高2.37mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、東西の一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.13×0.72-0.32m)で、底面には凹凸が目立つ。

土 層 埋土は①～⑥層で、②層には灰色粘質土が、③層には灰褐色粘質土がブロック状に混じる。また、①～③層の堆積が不自然である。

S K -616 (挿図20)

位 置 B13グリッド南部に位置し、坑底標高2.28mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、西側で内傾し東側は外傾する。そのうち、北側壁面は極端に内傾する。検出面での規模は(1.91×1.55-0.46m)で、底面はほぼ平坦である。

土 層 埋土は①～④層である。

S K -618 (挿図21・36・38・39 図版8・10・23・24・25)

位 置 B13グリッド南西部に位置し、S K -622を切る。坑底標高2.27mを測る。

形 態 平面形は梢円形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.00×1.94-0.39m)で、底面には凹凸がある。

土 層 埋土は①～⑥層で、③～⑥層には粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 鉢Po 8、板状木製品W8、棒状木製品W21が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K -619 (挿図22・36 図版8・10・23)

位 置 B13グリッド北部に位置し、坑底標高2.71mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.96×2.33-0.24m)とかなり大きく、底面には凹凸が目立つ。

土 层 埋土は①～⑥層である。

遺 物 口縁部Po 9が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K -620 (挿図22・36・38・41 図版8・11・23・24・26・27)

位 置 B12グリッド中央部に位置し、坑底標高2.32mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.30×1.55-0.51m)で、底面には凹凸が目立つ。

土 层 埋土は①～⑤層である。②・④層には灰褐色粘質土、③層には灰色粘質土・灰褐色粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 底部Po11、板状木製品W 3、編籠B 1が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K -621 (挿図23・36 図版12・23)

位 置 B12グリッド南部に位置し、坑底標高2.38mを測る。

形 態 平面形、底面形は円形、断面形はほぼ橢状を呈する。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(1.88×1.72-0.42m)で、底面には若干の凹凸がある。

土 层 埋土は①～⑥層である。

遺 物 底部Po13が出土した。

- 時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。
- S K - 623 (挿図24 図版8)
- 位 置 B13グリッド南部に位置し、S K - 630を切る。坑底標高2.16mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.19×2.07-0.65m)で、底面には凹凸が目立つ。
- 土 層 埋土は①～⑤層である。④層には灰褐色粘質土・茶褐色粘質土がブロック状に混じる。
- S K - 624 (挿図24 図版12)
- 位 置 C13グリッド北東部に位置し、坑底標高2.27mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、西側で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.87×1.30-0.52m)で、底面には若干の凹凸がある。
- 土 层 埋土は①～⑧層である。⑥層には灰色粘質土・茶褐色粘質土がブロック状に混じる。
- S K - 625 (挿図25・36 図版8・23)
- 位 置 C12グリッド西部に位置し、坑底標高2.15mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、東西の一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(2.92×1.19-0.58m)で、底面には若干の凹凸がある。
- 土 层 埋土は①～⑨層である。①・⑨層には灰色粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 底部Po14が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。
- S K - 626 (挿図25 図版8・12)
- 位 置 C12グリッド南西部に位置し、坑底標高2.17mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北側一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(2.17×2.16-0.66m)で、底面には若干の凹凸がある。
- 土 层 埋土は①～⑥層である。⑤層には灰色粘質土・灰褐色粘質土がブロック状に混じる。
- S K - 627 (挿図26・38・39 図版8・12・13・24)
- 位 置 C12グリッド中央部に位置し、坑底標高2.36mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、南側一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(2.26×1.88-0.54m)で、底面はほぼ平坦である。
- 土 层 埋土は①～⑦層である。①層には灰色粘質土が、⑦層には灰褐色粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 板状木製品W4・W6・W7・W11、棒状木製品W13・W22が出土した。
- S K - 628 (挿図26・35 図版13・22)
- 位 置 C12グリッド北東部に位置し、S D - 602に切られる。坑底標高2.54mを測る。
- 形 態 平面形、底面形は円形、断面形は楔状を呈する。壁の立ち上がりは、南北で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(0.73×0.65-0.25m)で、底面はほぼ平坦である。
- 土 层 埋土は①～⑤層である。
- 遺 物 妊Po5が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。
- S K - 629 (挿図26)
- 位 置 C13グリッド北部に位置し、坑底標高2.14mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北側一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.82×1.67-0.63m)で、底面には若干の凹凸がある。
- 土 层 埋土は①～⑥層である。⑥層には灰色粘質土・灰褐色粘質土がブロック状に混じる。
- S K - 631 (挿図27・35 図版13・22)

- 位 置 C13グリッド北西部に位置し、坑底標高2.34mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北東側一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は((1.48)×1.06-0.43m)で、底面には若干の凹凸がある。
- 土 層 埋土は①～⑫層である。①・⑨層には灰褐色粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 壺Po 2が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。
- S K - 632 (挿図28・36 図版8・14・23)
- 位 置 C12グリッド中央部近くに位置し、S D - 601・602に切られる。坑底標高2.23mを測る。
- 形 態 平面形、底面形は円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.10×1.83-0.64m)で、底面には若干の凹凸がある。
- 土 層 ①層はS D - 602で、土坑の埋土は②～⑥層である。
- 遺 物 口縁部Po10が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。
- S K - 634 (挿図28・36 図版8・14・23)
- 位 置 C12グリッド北東部に位置し、S D - 601に切られる。坑底標高2.25mを測る。
- 形 態 平面形、底面形は楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(1.60×1.50-0.56m)で、底面には凹凸がある。
- 土 层 埋土は①～⑥層である。①・⑥層には灰色粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 底部Po12が出土し、Po12はS K - 608出土の底部片と接合した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。
- S K - 635 (挿図29 図版15・16)
- 位 置 C12グリッド東部に位置し、坑底標高2.63mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北側で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(0.79×0.62-0.33m)で、底面には若干の凹凸がある。
- 土 层 埋土は①～⑤層である。
- S K - 637 (挿図29 図版15・16・17)
- 位 置 C12グリッド南部に位置し、坑底標高2.29mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北側と西側一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.30×1.20-0.47m)で、底面には凹凸がある。
- 土 层 埋土は①～⑥層である。
- S K - 639 (挿図30・35・40 図版15・17・22・25)
- 位 置 C12グリッド南部に位置し、坑底標高2.34mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、ごく一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.85×1.66-0.43m)で、底面には凹凸が目立つ。
- 土 层 埋土は①～⑤層である。また、土坑内中腹壁面近くで粘土塊を確認した。粘土塊はほぼ全周する。
- 遺 物 壺Po 7、杭W31・W33が出土した。Po 7はS K - 641出土の壺片と接合した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。
- S K - 640 (挿図29・38・40 図版15・18・24・25)
- 位 置 C13グリッド東部に位置し、坑底標高2.16mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、南側半分で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(2.00×1.36-0.65m)で、底面には凹凸が目立つ。
- 土 层 埋土は①～④層である。また、図化できなかったが、土坑内中腹東側一部で壁面近くに粘土塊を確認

した。

遺 物 鋼W1、杭W29・W34が出土した。

S K - 641 (挿図31・35 図版15・18・22)

位 置 C13グリッド南東部に位置し、坑底標高2.04mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(3.11×2.46-0.76m)と深く、底面には凹凸が目立つ。

土 層 埋土は①～⑧層である。

遺 物 壺Po 7、棒状の木が出土した。Po 7はS K - 639出土の壺片と接合した。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K - 642 (挿図31 図版15・19)

位 置 C13グリッド中央部近くに位置し、坑底標高2.37mを測る。

形 態 平面形、底面形は円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(1.00×0.68-0.49m)で、底面には凹凸がある。

土 層 埋土は①～⑦層である。③層には植物遺体が多量に含まれる。また、土坑内中腹南側壁面近くで粘土塊を確認した。

S K - 644 (挿図32・35・39 図版15・19・22・24・25)

位 置 C13グリッド南西部に位置し、坑底標高2.05mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.41×(2.20)-0.70m)と深く、底面には若干の凹凸がある。

土 層 埋土は①～④層である。①層には植物遺体が多量に含まれる。

遺 物 壺Po 1、棒状木製品W14・W15が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K - 645 (挿図33・35 図版15・20・22)

位 置 C13グリッド西部に位置し、坑底標高2.15mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北側一部で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.43×(1.05)-0.58 m)で、底面には凹凸がある。

土 層 埋土は①～⑤層である。②層には植物遺体が多量に含まれる。

遺 物 赤彩を施す壺Po 3が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K - 646 (挿図32 図版15)

位 置 C13グリッド西部に位置し、坑底標高2.13mを測る。

形 態 平面形は橢円形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北側で内傾し他は外傾する。検出面での規模は(1.35×1.15-0.55m)で、底面には凹凸がある。

土 層 埋土は①～⑦層である。①・③層には植物遺体が多量に含まれる。

2 溝 (挿図34 図版21)

S D - 601～604は自然小河川と考えられる。時期については不明である。

S D - 601

位 置 C12グリッド北東部より同グリッド西部にかけて検出した。S D - 602を切る。検出面標高は2.90～2.80mである。

形 態 溝は蛇行するが、走向はS - 53° - Wの方向である。検出規模は、全長8.25m、幅0.90～1.41m、深さ0.08mを測る。断面形は不定形である。

土 層 埋土は①層で、砂礫混じりの粘質土である。

性 格 形態的特徴から自然小河川と考える。

S D-602

位 置 C12グリッド北東部より同グリッド西部にかけて検出した。S D-601に切られる。検出面標高は3.00～2.80mである。

形 態 溝は蛇行するが、走向はS-70°-Wの方向である。検出規模は、全長5.78m、幅0.98～1.50m、深さ0.12mを測る。断面形は皿状である。

土 層 埋土は①層で、砂礫混じりの粘質土である。

性 格 形態的特徴から自然小河川と考える。

S D-603

位 置 D12グリッド北西部よりD13グリッド中央部にかけて検出した。検出面標高は3.00～2.80mである。

形 態 溝は蛇行し、走向は一定でない。検出規模は、全長8.78m、幅0.25～0.60m、深さ0.25mを測る。断面形は不定形である。

土 層 埋土は①層で、砂礫層である。

性 格 形態的特徴から自然小河川と考える。

S D-604

位 置 C13グリッド南東部で検出した。S K-643を切る。検出面標高は2.70mである。

形 態 溝は蛇行するが、走向はS-12°-Eの方向である。検出規模は、全長1.82m、幅0.95～1.82m、深さ0.12mを測る。断面形は不定形である。

土 层 埋土は①層で、砂礫層である。

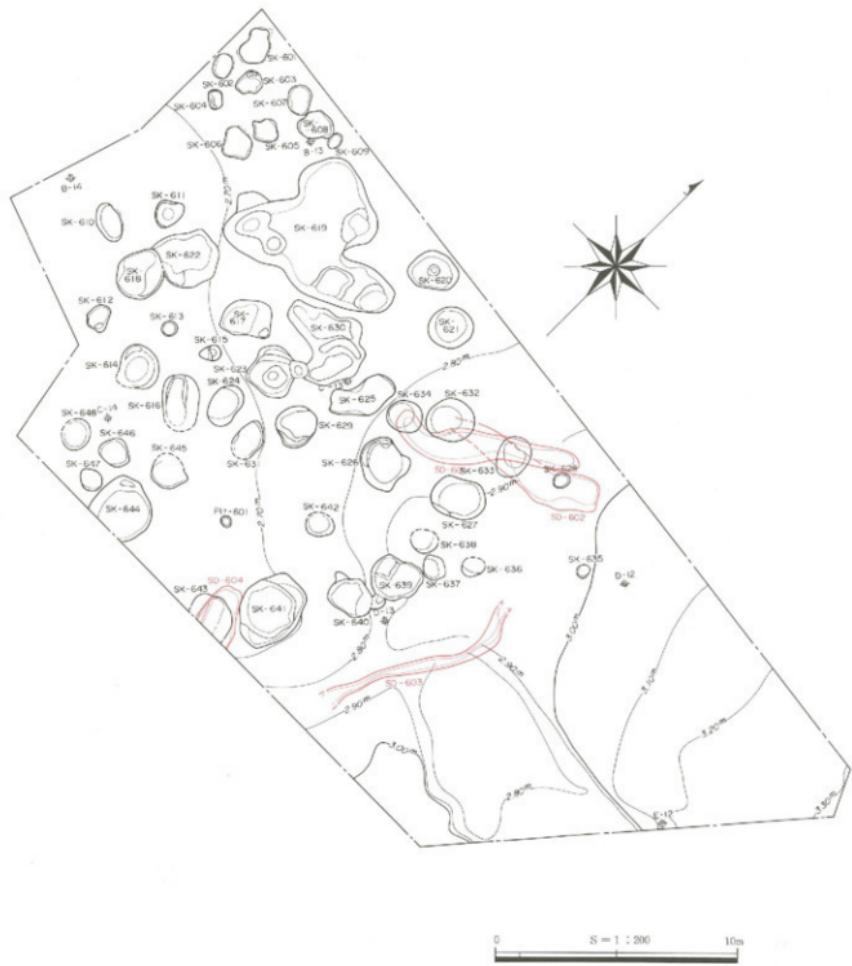
性 格 形態的特徴から自然小河川と考える。

3 ピット

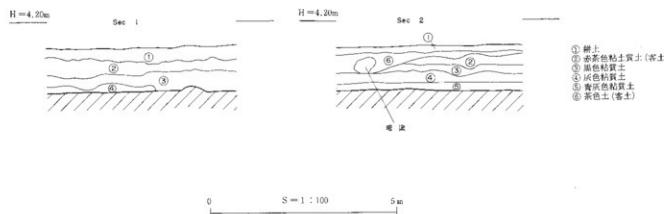
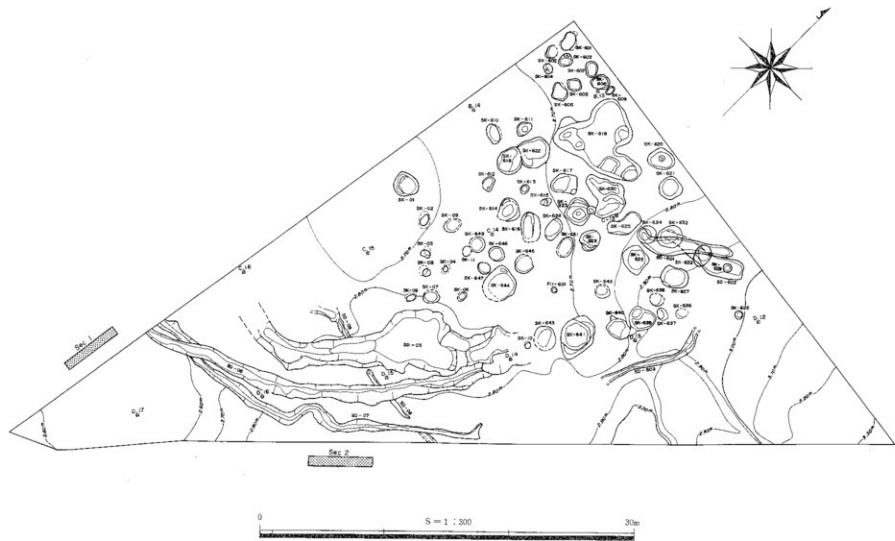
C13グリッド中央部でPit-601の1基のみ検出した。検出規模は(0.49×0.38-0.16m)である。



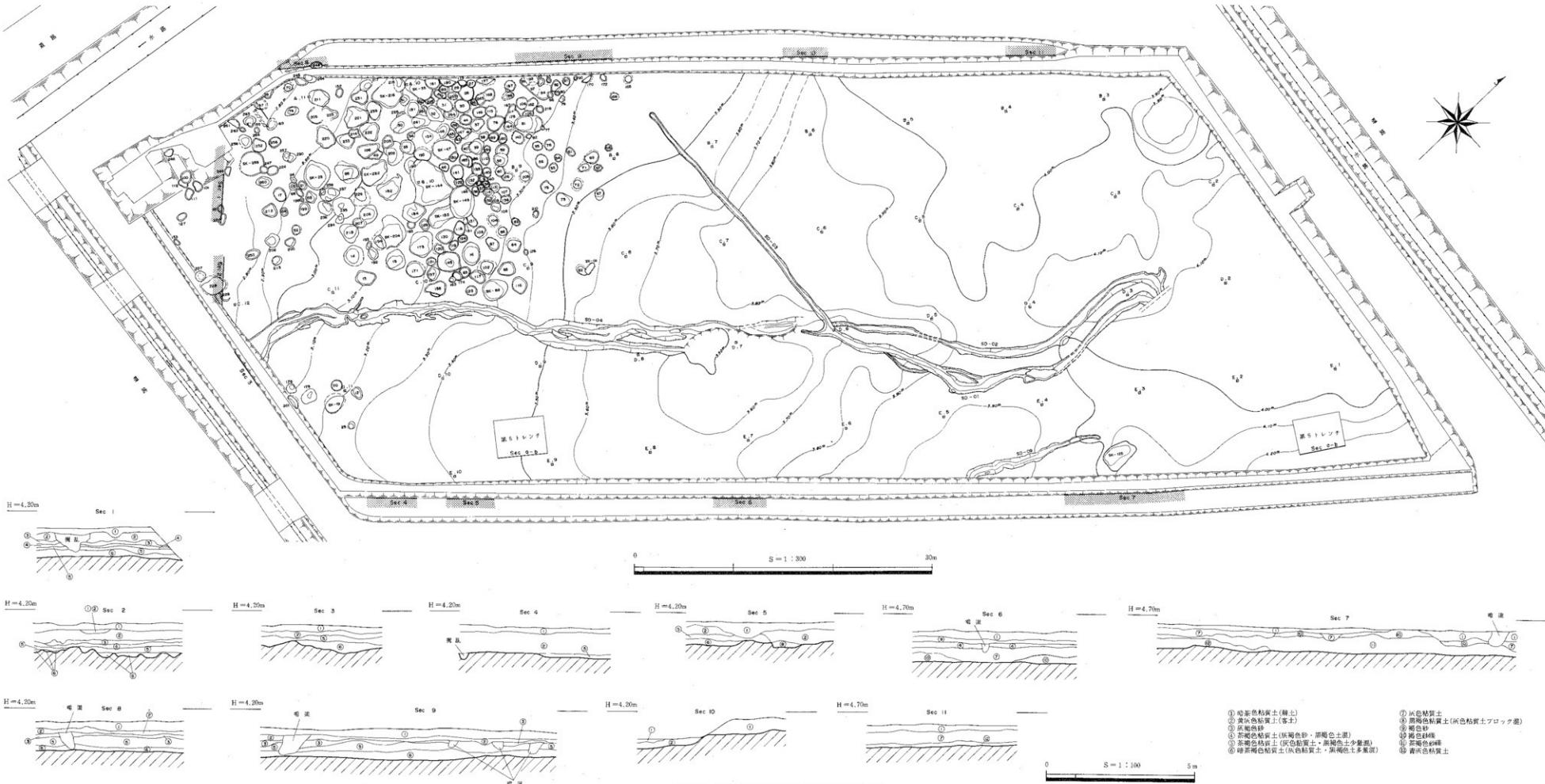
挿図13 福岡遺跡6区基準杭設定図



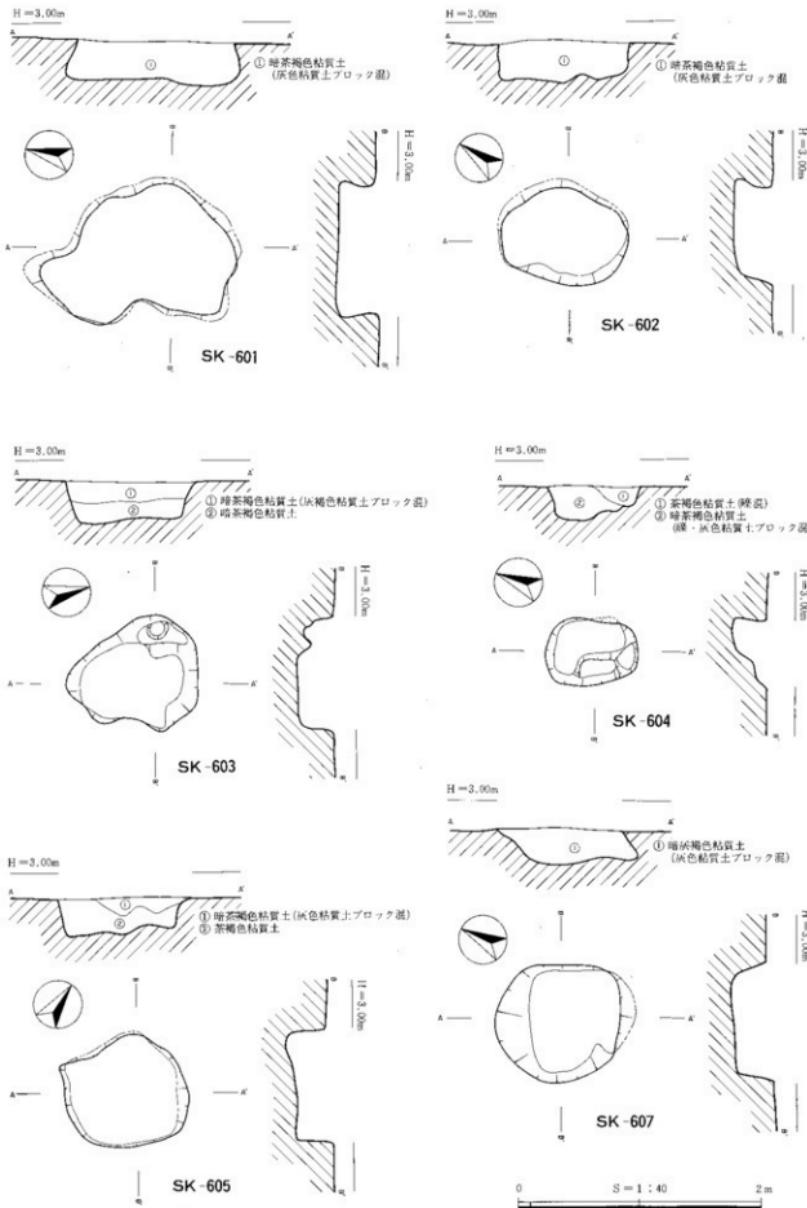
挿図14 福岡遺跡6区遺構配置図



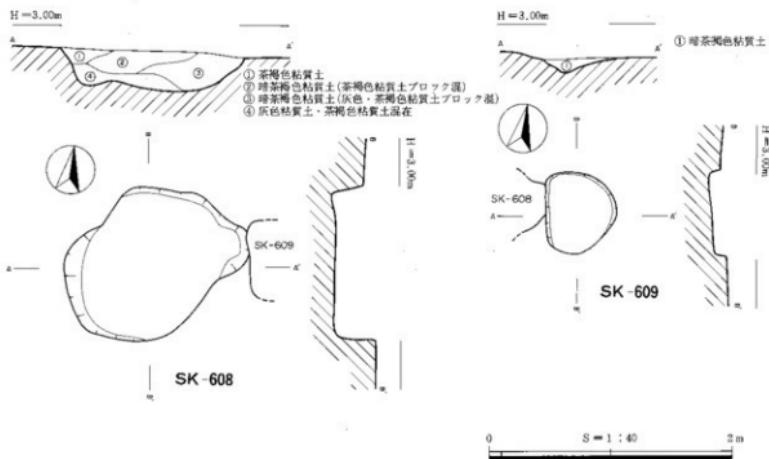
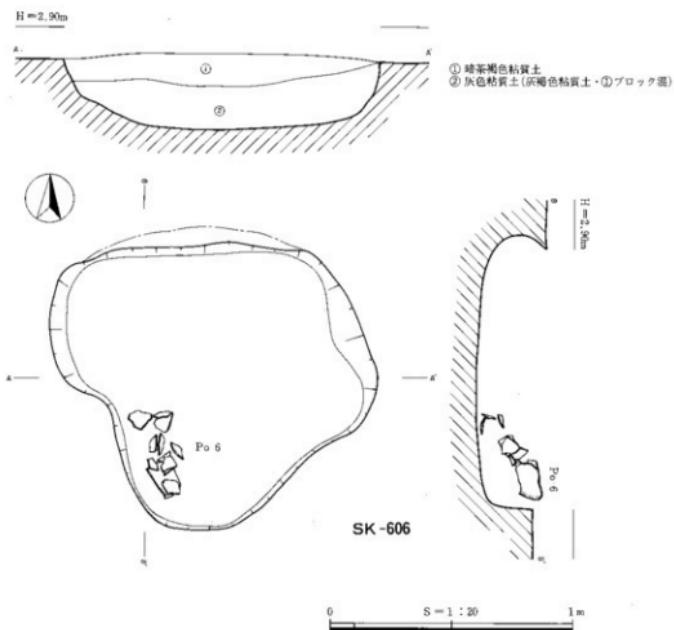
插図15 福岡遺跡1区・6区遺構配置図・土層断面図



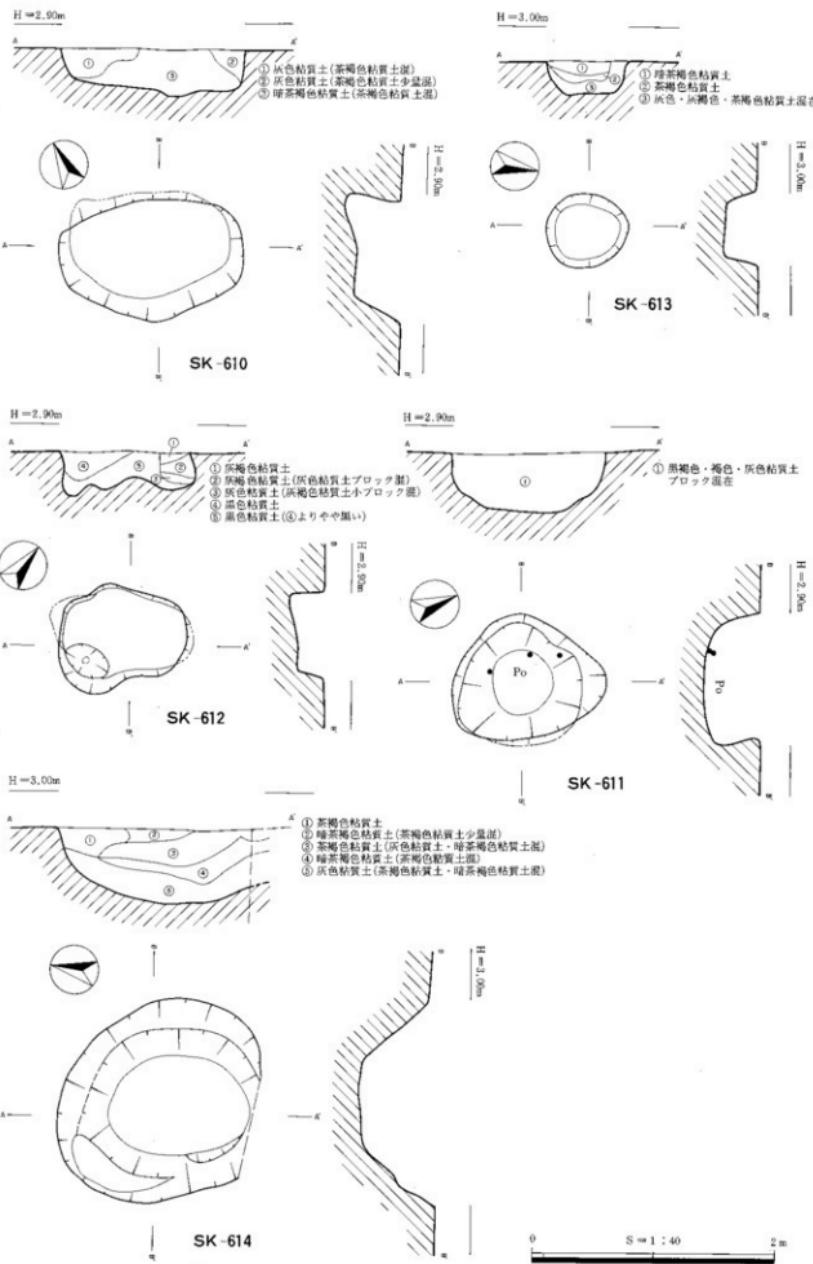
挿図16 福岡遺跡2区造構配図・土層断面図



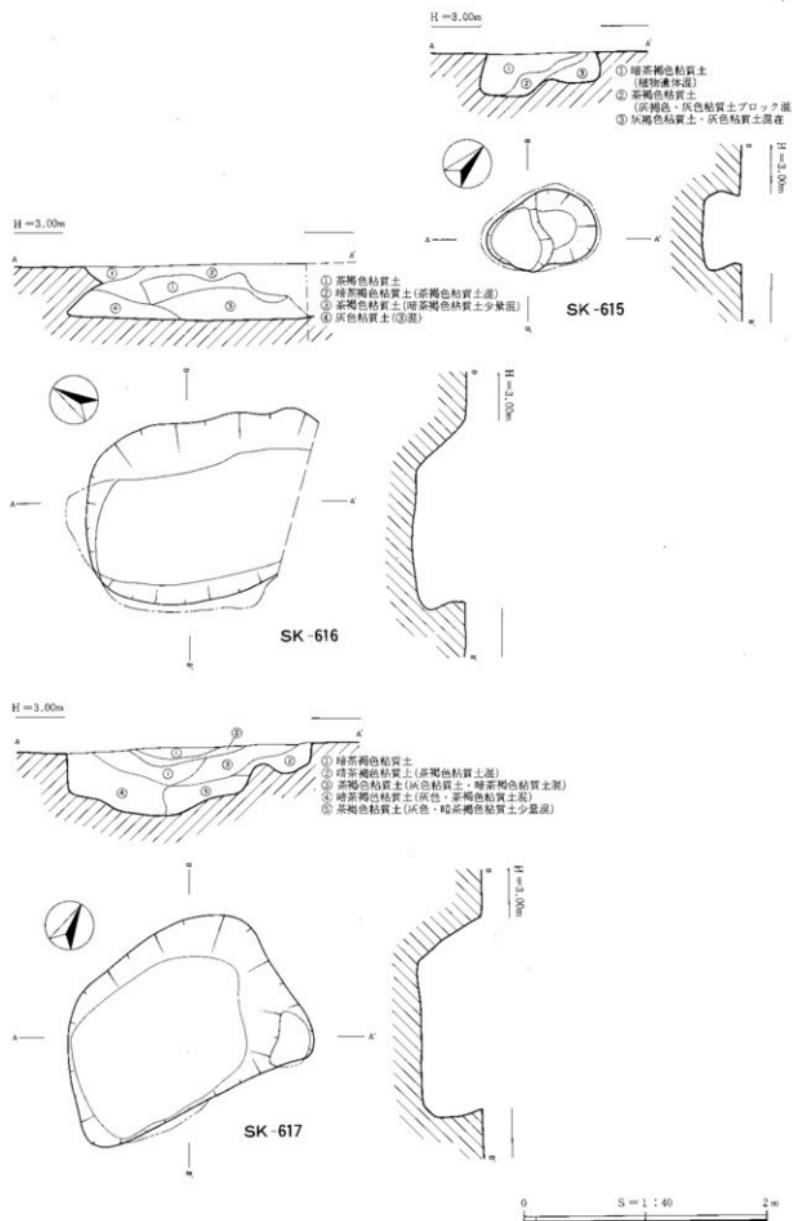
挿図17 福岡遺跡6区SK-601・602・603・604・605・607遺構図



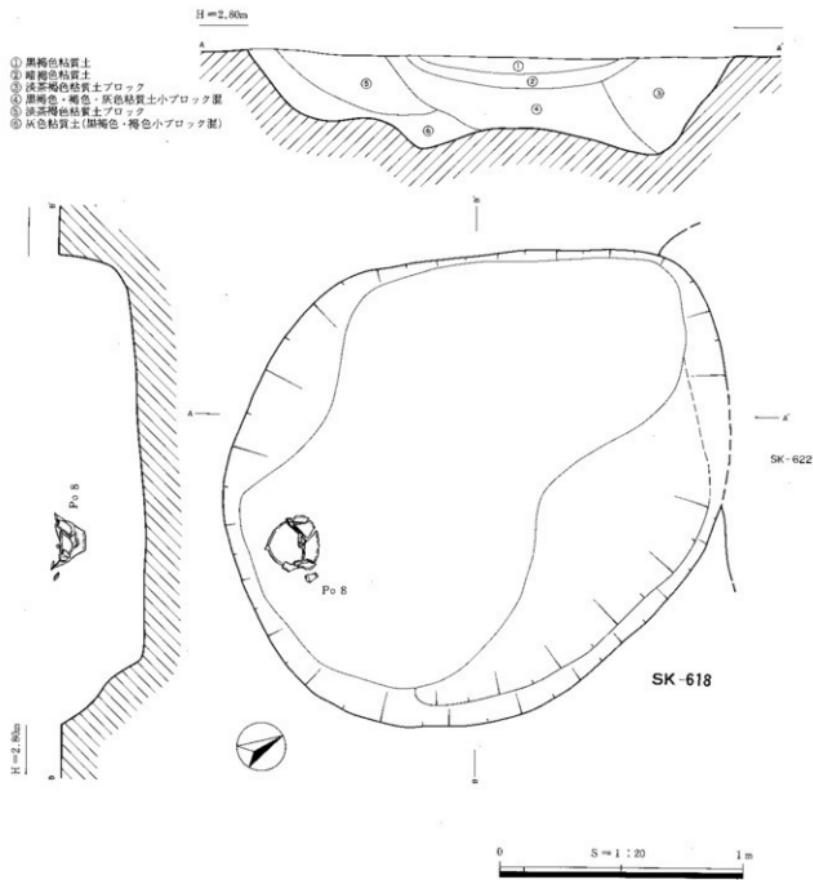
挿図18 福岡遺跡6区SK-606・608・609構造図



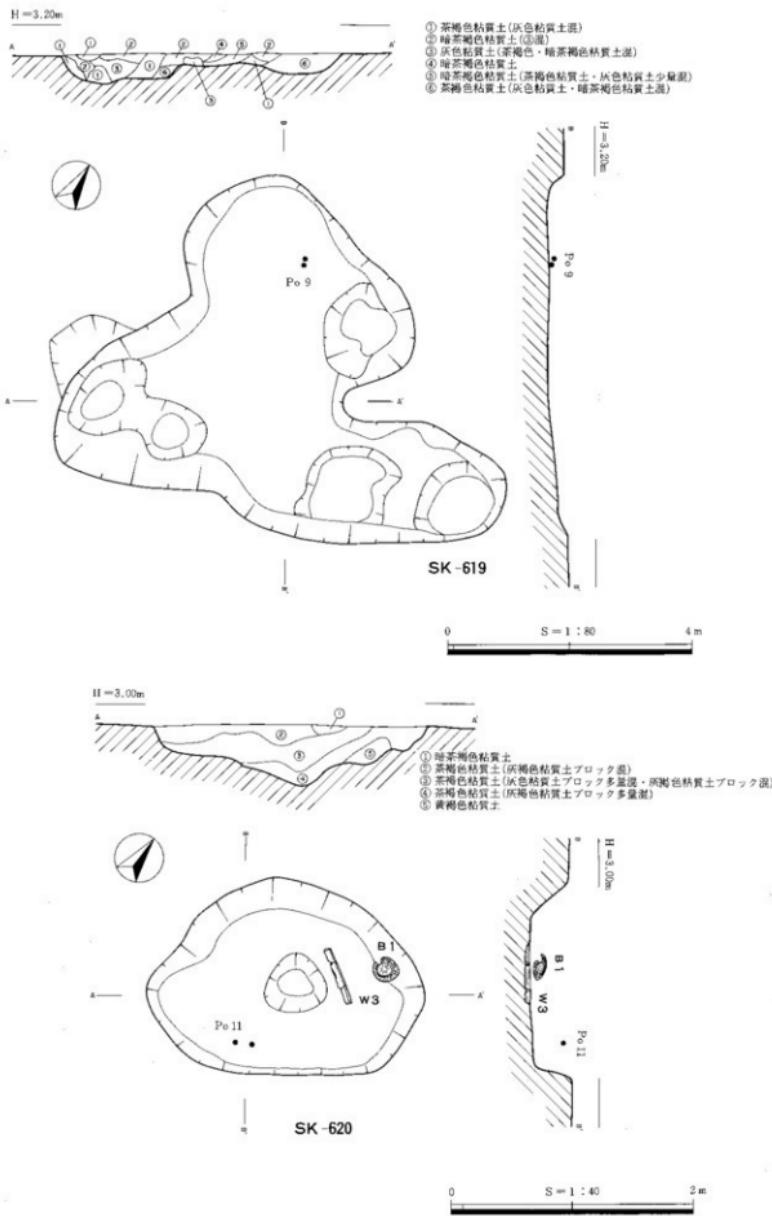
挿図19 福岡遺跡 6 区 SK-610・611・612・613・614遺構図



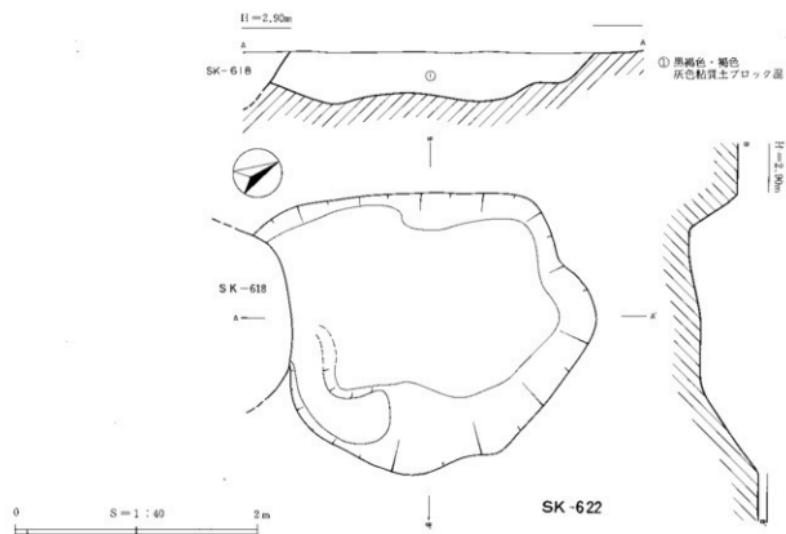
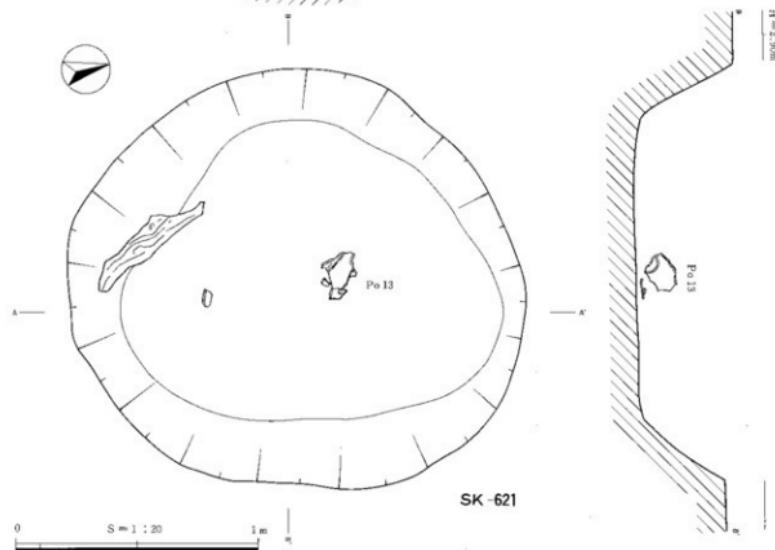
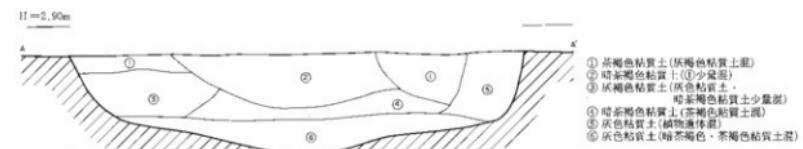
捕図20 福岡遺跡 6区 S K-615・616・617造構図



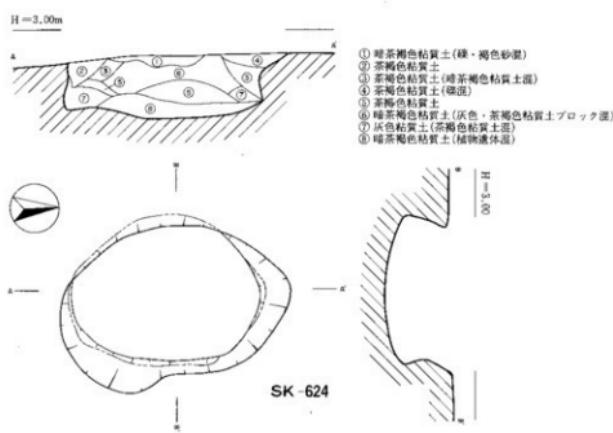
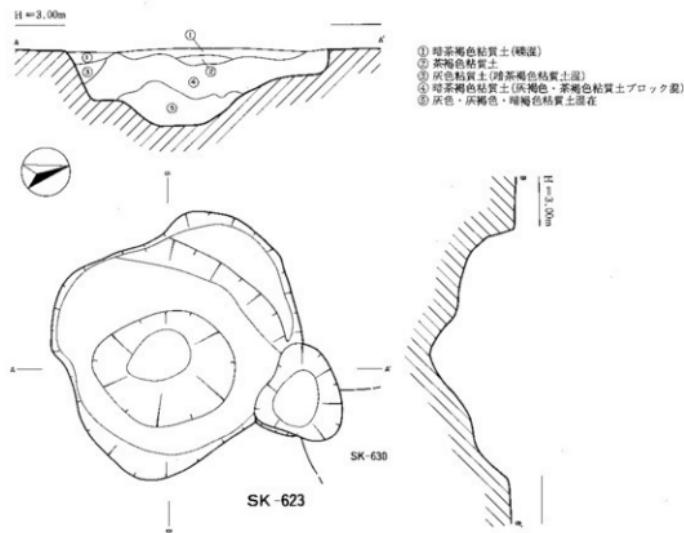
挿図21 福岡遺跡 6区 SK-618遺構図



挿図22 福岡遺跡6区SK-619・620造構図

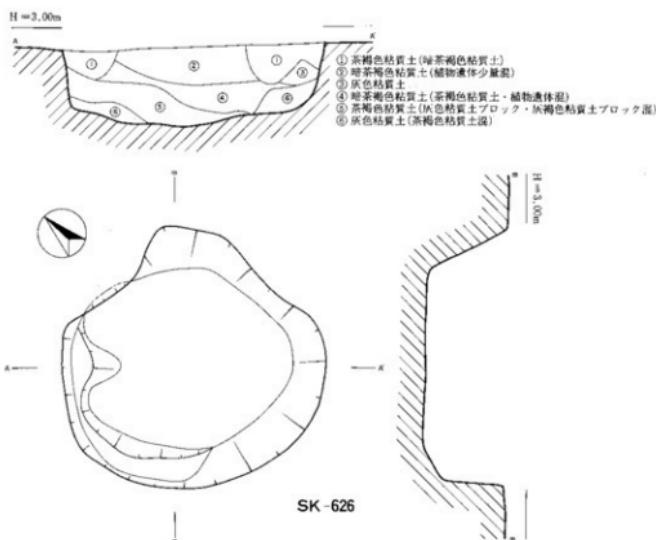
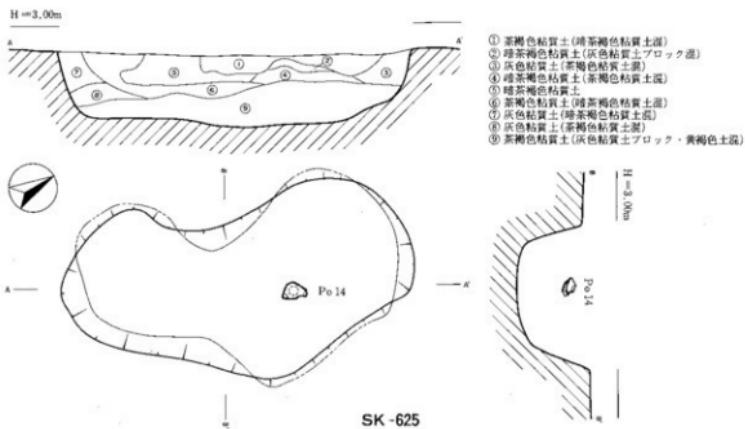


挿図23 福岡遺跡 6区 SK-621・622遺構図



0 S = 1 : 40 2m

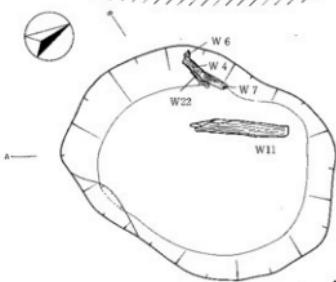
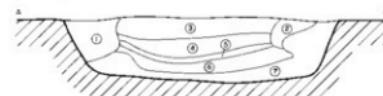
插図24 福岡遺跡6区SK-623・624遺構図



0 S = 1 : 40 2m

挿図25 福岡遺跡6区SK-625・626遺構図

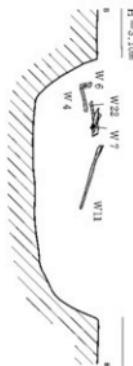
H = 3.10m



0 S = 1 : 20 1 m

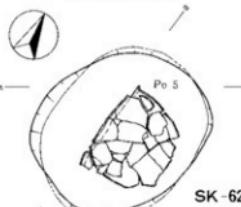
- ① 黒褐色粘質土(灰色粘質土ブロック層)
- ② 黒褐色粘質土(鉢底)
- ③ 黑褐色粘質土(茶褐色粘質土層)
- ④ 黑褐色粘質土
- ⑤ 茶褐色粘質土
- ⑥ 黑褐色粘質土
- ⑦ 茶褐色粘質土

- ⑧ 暗褐色粘質土
- ⑨ 暗褐色粘質土(茶褐色粘質土上層)
- ⑩ 暗褐色粘質土
- (H.褐色粘質土ブロック層)



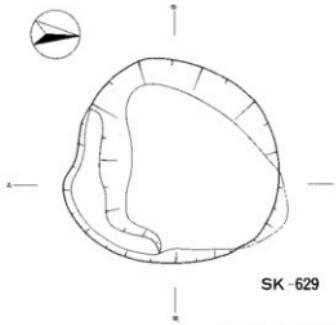
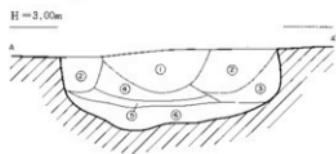
H = 2.90m

- ① 黒褐色粘質土
- ② 黑褐色粘質土(植物遺体層)
- ③ 黑褐色粘質土
- ④ 墓穴褐色粘質土
- ⑤ 黑褐色粘質土(灰色・褐色粘質土層)
- ⑥ 黑褐色粘砂土(河川堆土)



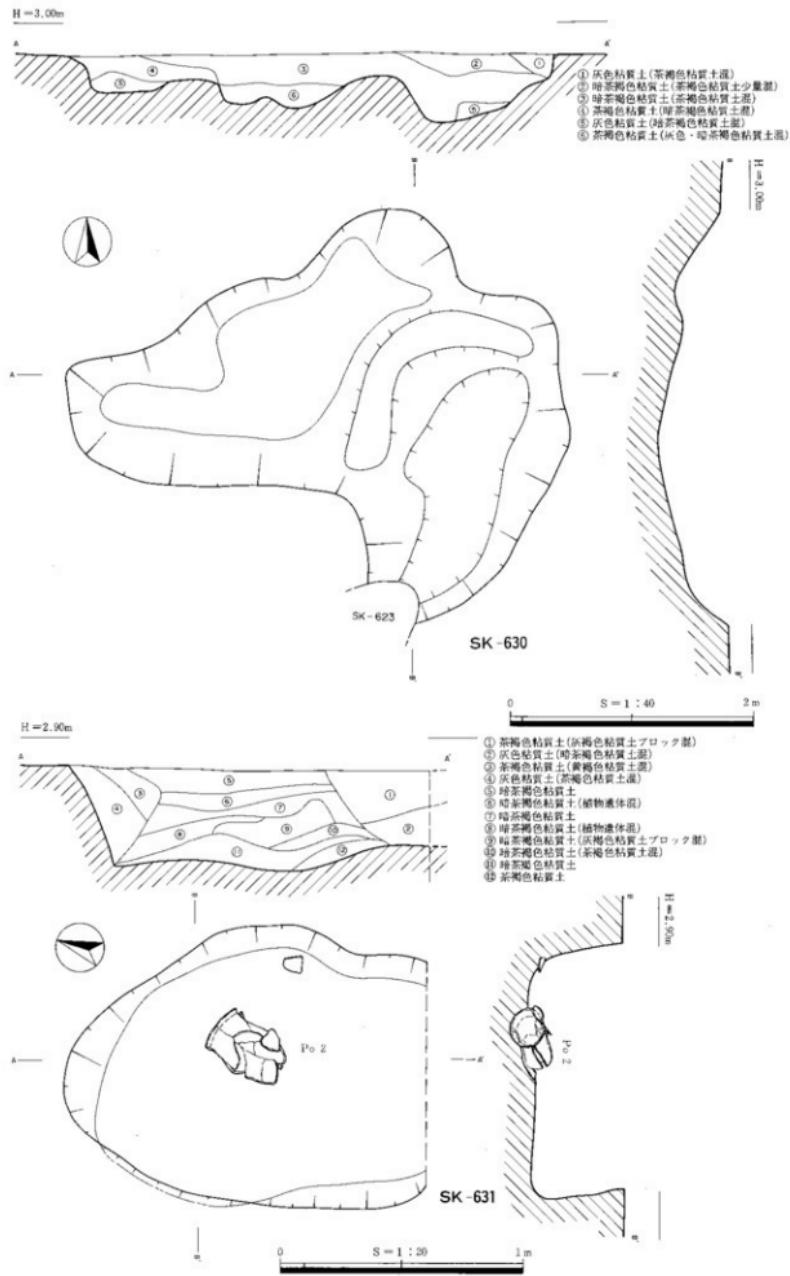
SK-628

0 S = 1 : 20 1 m

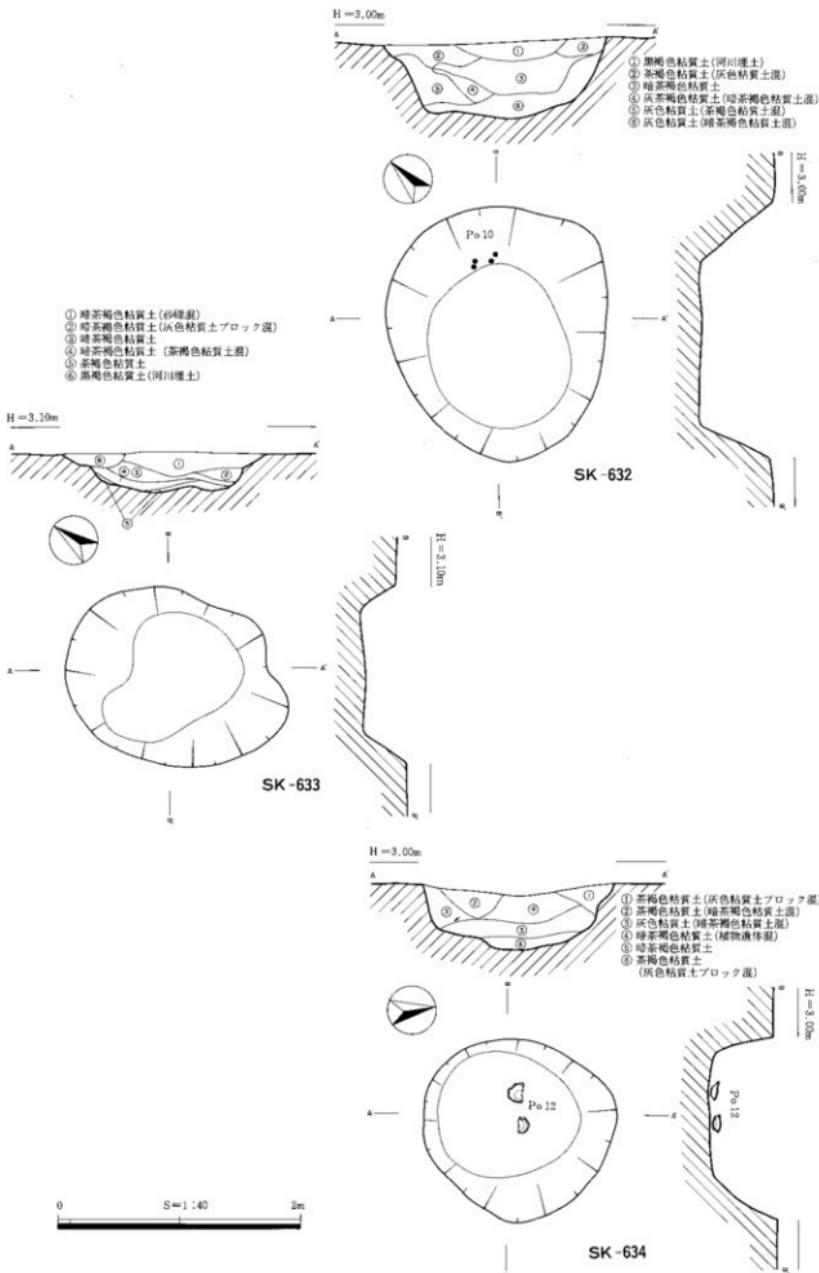


0 S = 1 : 40 2 m

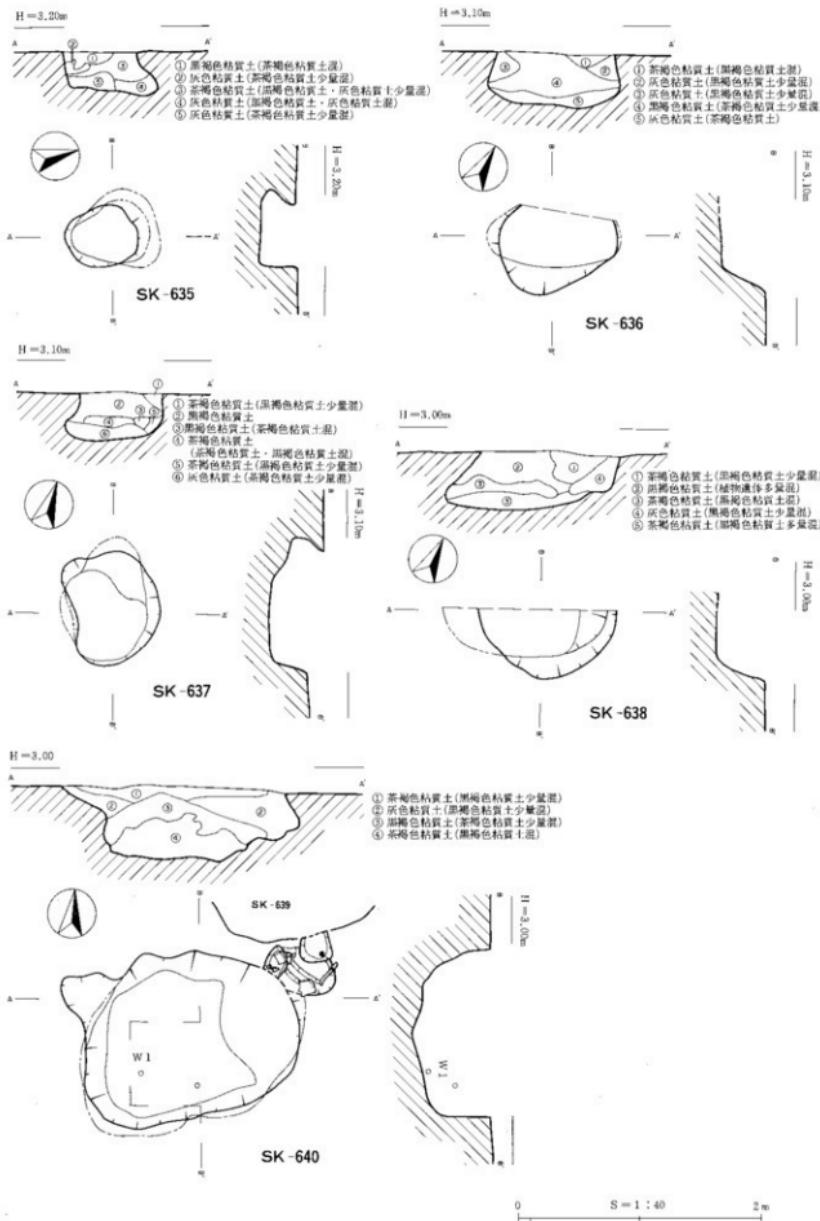
図26 福岡遺跡 6区 SK-627・628・629遺構図



挿図27 福岡遺跡 6区SK-630・631遺構図



插図28 福岡遺跡6区SK-632・633・634遺構図



插図29 福岡遺跡 6区 SK-635・636・637・638・640造構図

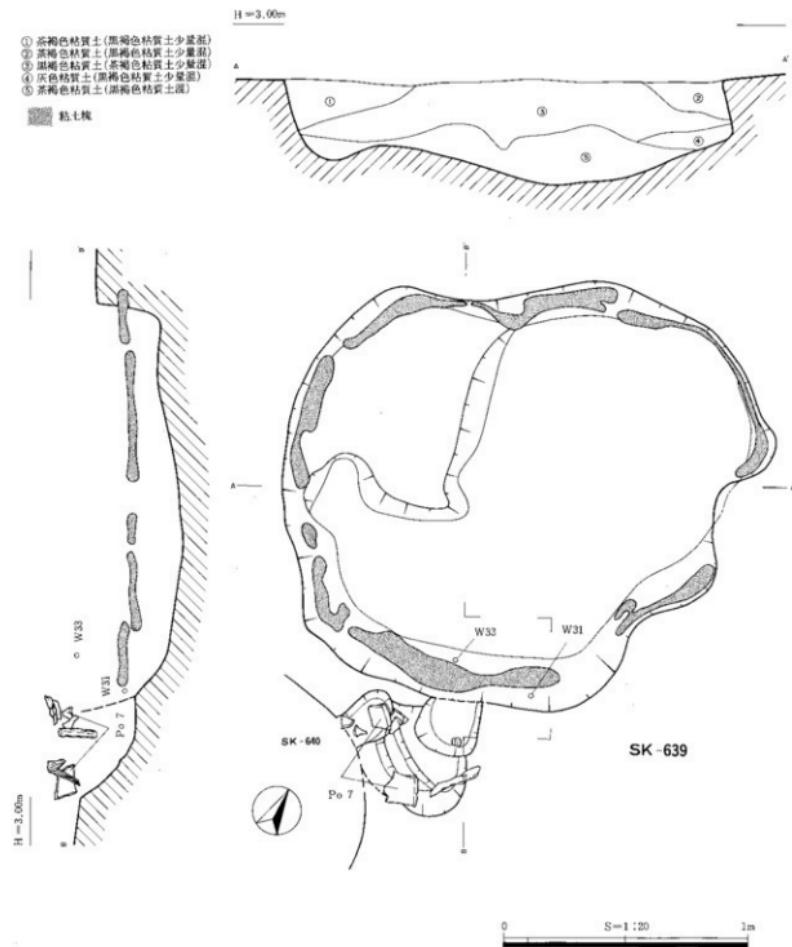
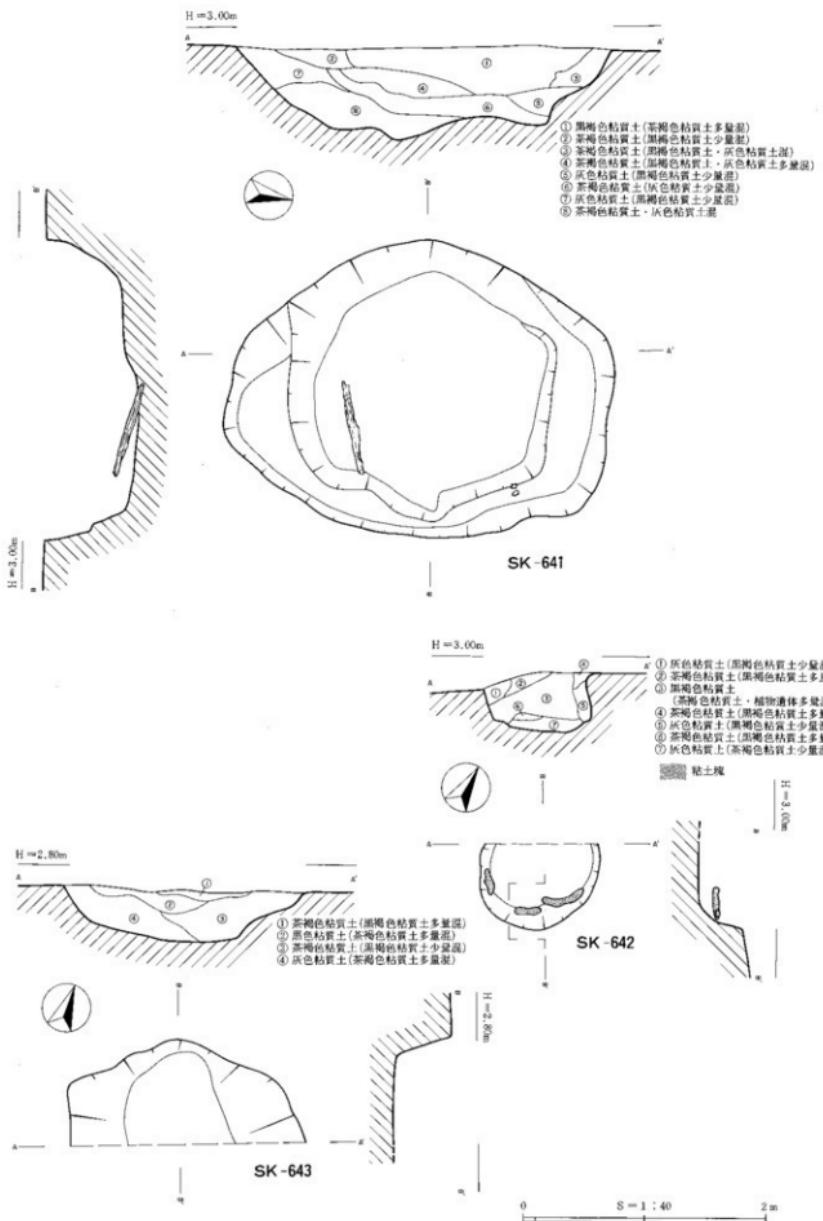
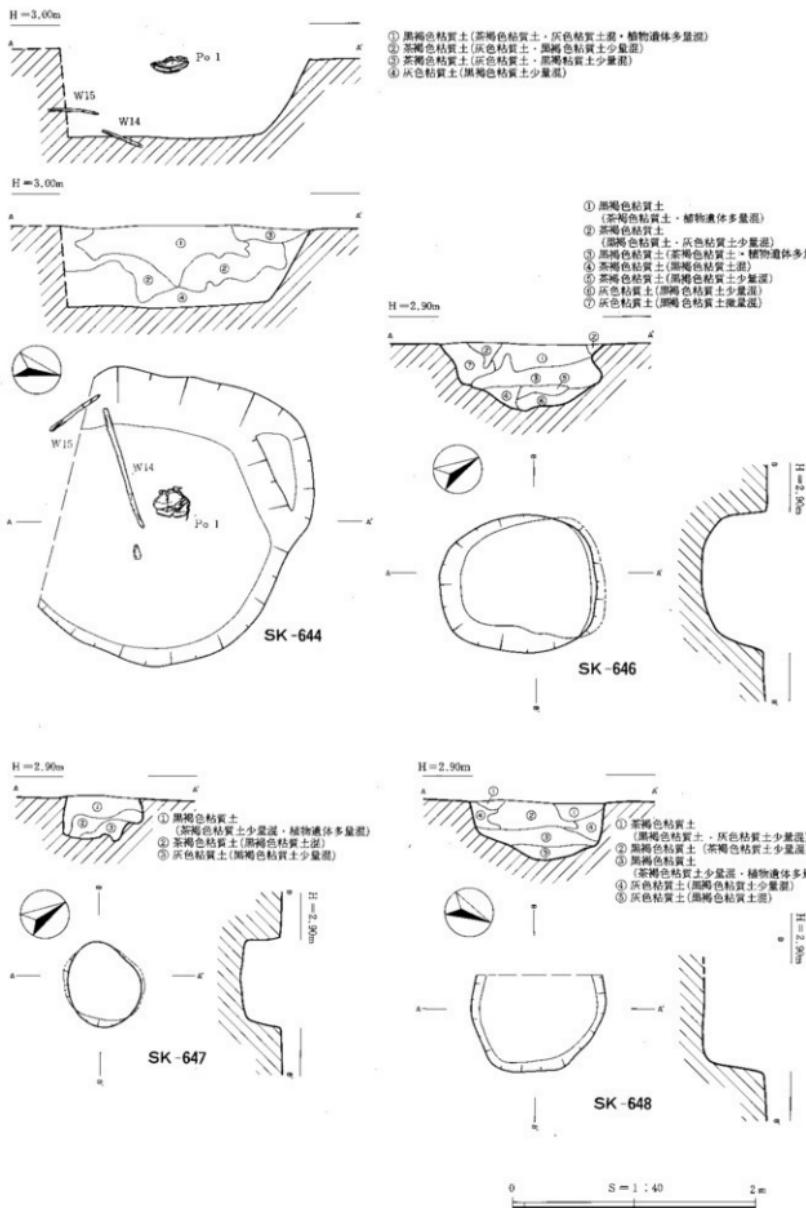


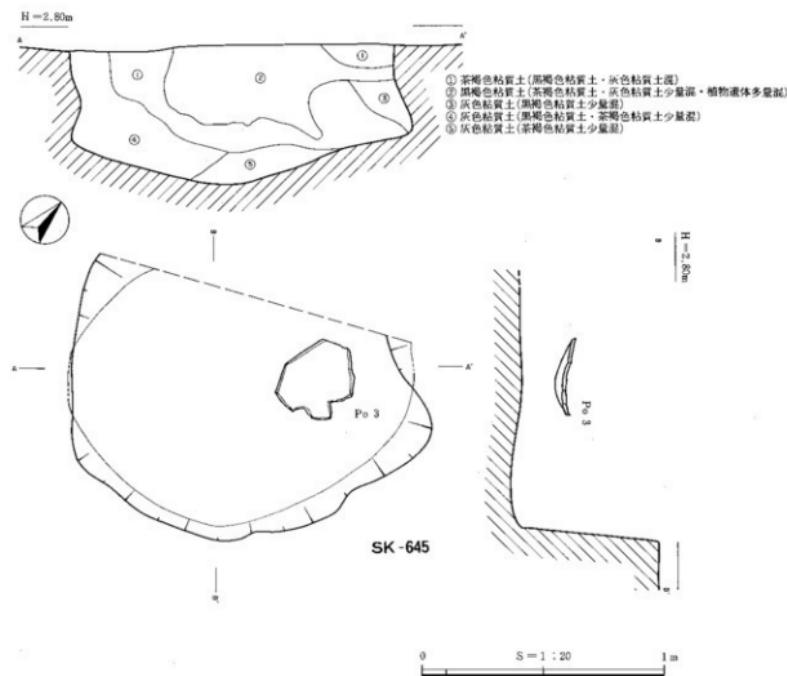
插图30 福岡遺跡 6区 SK-639遺構図



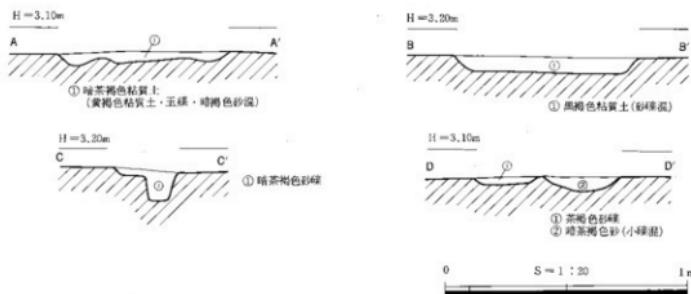
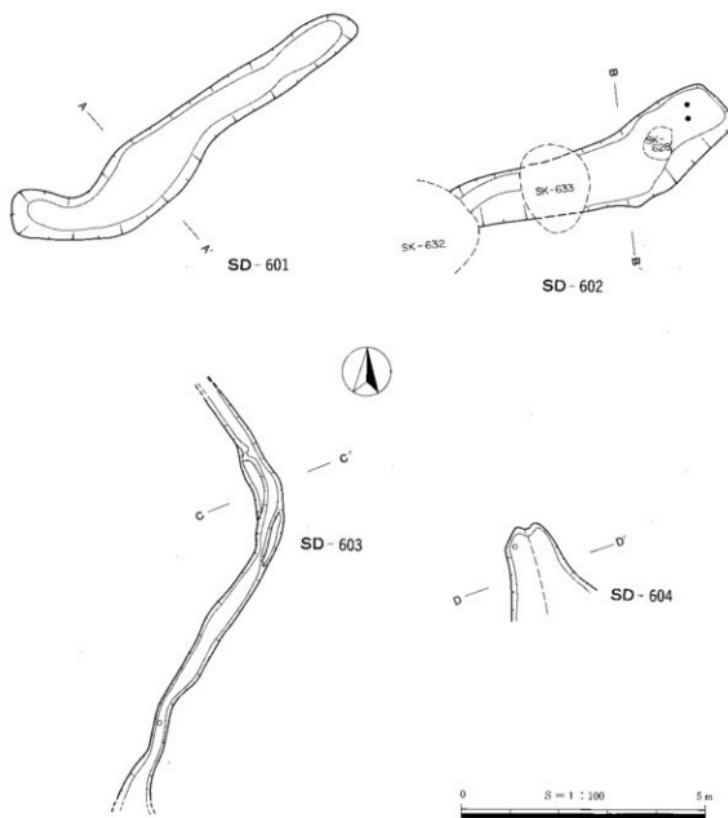
插図31 福岡遺跡6区SK-641・642・643遺構図



插図32 福岡遺跡6区SK-644・645・647・648遺構図



插図33 福岡遺跡 6区 SK-645・Pit-601遺構図



插図34 福岡遺跡6区SD-601・602・603・604遺構図

摺表5 福岡遺跡6区土坑一覧表

遺構	摺図	図版	アリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×幅×深m)	坑底標高(m)	遺物・備考	時期
S K-601	17	7	A13	不定形	内傾(一部外傾)	1.50×1.13-0.35	2.48		
S K-602	17	7	A13	横円形	内傾外傾	1.06×0.86-0.36	2.50		
S K-603	17	7	A13	不定形	外傾	1.09×0.94-0.35	2.47		
S K-604	17	7	A13	横円形	1/2内傾1/2外傾	0.76×0.55-0.30	2.50	Po 6	弥生時代前期
S K-605	17	7	A13	不定形	1/2内傾1/2外傾	1.04×0.95-0.33	2.44		
S K-606	18	7・9	A13	不定形	1/2内傾1/2外傾	1.30×1.13-0.32	2.47	Po 6 Po18	弥生時代前期
S K-607	17	7	A13	横円形	内傾外傾	1.16×0.96-0.31	2.47		
S K-608	18	7	A12	不定形	外傾直立	1.46×1.26-0.33	2.45	Po12	
S K-609	18	7	B12	横円形	外傾直立	0.67×0.58-0.10	2.59		
S K-610	19	8	B13	横円形	内傾外傾	1.51×1.07-0.45	2.24		
S K-611	19	8	B13	不定形	内傾外傾	1.27×1.10-0.49	2.18		
S K-612	19	8・9	B13	不定形	内傾外傾	1.13×0.72-0.32	2.37		
S K-613	19		B13	円形	外傾	0.67×0.61-0.28	2.44		
S K-614	19		B13	横円形	外傾	(1.60)×1.66-0.62	2.07		
S K-615	20		B13	不定形	内傾	0.99×0.64-0.35	2.43		
S K-616	20		B13	不定形	内傾外傾	1.91×1.55-0.46	2.28		
S K-617	20	8	B13	不定形	1/2内傾1/2外傾	2.02×1.66-0.56	2.19		
S K-618	21	8・10	B13	横円形	外傾	2.00×1.94-0.39	2.27	Po 8 W 8 W21	弥生時代前期
S K-619	22	8・10	B13	不定形	外傾	2.96×2.33-0.24	2.71	Po 9	弥生時代前期
S K-620	22	8・11	B12	不定形	外傾	2.30×1.55-0.51	2.32	Po11 W 3 編甌(B 1)	弥生時代前期
S K-621	23	12	B12	円形	外傾	1.88×1.72-0.42	2.38	Po13	弥生時代前期
S K-622	23		B13	不定形	外傾	2.53×2.30-0.44	2.24		
S K-623	24	8	B13	不定形	外傾	2.19×2.07-0.65	2.16		
S K-624	24	12	C13	不定形	1/2内傾1/2外傾	1.87×1.30-0.52	2.27		
S K-625	25	8	C12	不定形	1/2内傾1/2外傾	2.92×1.19-0.58	2.15	Po14	弥生時代前期
S K-626	25	8・12	C12	不定形	外傾(一部内傾)	2.17×2.16-0.66	2.17		
S K-627	26	8・12	C12	不定形	1/2内傾1/2外傾	2.26×1.88-0.54	2.36	W 4 W13 W 6 W22 W 7 W11	
S K-628	26	13	C12	円形	1/2内傾1/2外傾	0.73×0.65-0.25	2.54	Po 5	弥生時代前期
S K-629	26		C13	不定形	1/2内傾1/2外傾	1.82×1.67-0.63	2.14		
S K-630	27	8	B13	不定形	外傾	4.09×3.39-0.56	2.18		
S K-631	27	13	C13	不定形	1/2内傾1/2外傾	(1.48)×1.06-0.43	2.34	Po 2	弥生時代前期
S K-632	28	8・14	C12	円形	外傾	2.10×1.83-0.64	2.23	Po10	弥生時代前期
S K-633	28		C12	不定形	外傾	1.64×1.47-0.33	2.56		
S K-634	28	8・14	C12	横円形	外傾	1.60×1.50-0.56	2.25	Po12	弥生時代前期
S K-635	29	15・16	C12	不定形	内傾外傾	0.79×0.62-0.33	2.63		
S K-636	29	15	C12	不定形	内傾外傾	1.09×(0.66)-0.43	2.42		
S K-637	29	15・16	C12	不定形	内傾外傾	1.30×1.20-0.47	2.29		
S K-638	29	15	C12	不定形	内傾外傾	1.45×0.59-0.48	2.33		
S K-639	30	15・17	C12	不定形	外傾(一部内傾)	1.85×1.66-0.43	2.34	Po 7 W31 W33	弥生時代前期
S K-640	29	15・18	C13	不定形	内傾外傾	2.00×1.36-0.65	2.16	W 1 W 29 W34	
S K-641	31	15・18	C13	不定形	外傾	3.11×2.46-0.76	2.04	Po 7	弥生時代前期
S K-642	31	15・19	C13	円形	外傾	1.00×0.68-0.49	2.37		
S K-643	31	15	C13	不定形	外傾	1.95×0.88-0.41	2.17		
S K-644	32	15・19	C13	不定形	外傾	2.41×(2.20)-0.70	2.05	Po 1 W 14 W15	弥生時代前期
S K-645	33	15・20	C13	不定形	1/2内傾1/2外傾	1.43×(1.05)-0.58	2.15	Po 3	弥生時代前期
S K-646	32	15	C13	横円形	内傾外傾	1.35×1.15-0.55	2.13		
S K-647	32	15	C14	円形	内傾外傾	0.71×0.67-0.36	2.37		
S K-648	32	15・21	C14	円形	外傾	1.10×0.79-0.47	2.20		



調査風景

## 第2節 遺物

福岡遺跡6区の調査に伴い、弥生土器、古墳時代以降の土器、木製品、石器、編籠が出土した。以下、それらについて記述する。

### 1 土器

#### (1) 弥生時代前期の土器

壺 Po 1～Po 3 (挿図35 図版22)

Po 1の口縁部は、緩やかに外反し端部に平坦面をもつ。頸部には段を残し肩部に沈線を引く。Po 2も口縁部が緩やかに外反し端部は平坦気味で、頸部は長く胴部はあまり張らず長胴である。Po 3は胴部片で、胴部最大径の位置より少し上に2条の刻み目突帯をめぐらす。復元値ではあるが、胴部最大径が50.2cmとかなり大型で偏球状を呈す。いづれも外面には丁寧なヘラミガキを施す。

壺 Po 4～Po 7 (挿図35 図版22・23)

Po 4の口縁部は、短く外反し端部に刻み目を入れ、胴上部に沈線を引く。Po 5～Po 7は、口縁部が短く外反し胴部はやや膨らみをもつ。Po 5・Po 7に比べ、Po 6は胴部から底部にかけてやや直線的にすぼむ感がある。Po 5～Po 7の外面はハケメを施す。

鉢 Po 8 (挿図36 図版23)

口縁部が緩やかに外反し、胴部は若干膨らみ安定した平底である。外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキとナデを施している。

口縁部 Po 9・Po 10 (挿図36 図版23)

緩やかに外反する口縁部片である。端部については、Po 9を平坦にPo 10を丸く仕上げる。内外面ヘラミガキを施す。

底部 Po 11～Po 15・Po 18 (挿図36 図版23)

Po 12～Po 14は、底部から胴下部にかけて屈曲が認められる。外面調整はPo 11～Po 13にヘラミガキ、Po 14・Po 18にハケメを施す。

#### (2) 弥生時代後期の土器 (挿図36 図版23)

壺 Po 16

複合口縁部片である。胴部内面はヘラケズリを施す。

脚部 Po 17

底脚環の脚部であろうか。器面の剥離がひどく調整不明である。

底部 Po 19・Po 20

いづれも内外面ナデを施す。

#### (3) 古墳時代以降の土器 (挿図37 図版23)

須恵器 Po 21～Po 26

Po 21は6C後半の坏蓋、Po 22は6C末の坏身である。Po 22は薄手で、立ち上がりは短く内傾し、受け部も外上方へごく短い。Po 23は壺口縁部片、Po 24～Po 26は壺胴部片である。胴部片はいづれも、外面に格子ふうタタキ後カキメ、内面に同心円文タタキを施す。

土師質土器 Po 27～Po 29

Po 27は口縁部片で、外上方に立ち上がりながら壺部を薄く仕上げる。Po 28・Po 29は底部片で、胴部との境の稜が明瞭である。いづれも内外面ナデを施す。

## 2 木 製 品 (樹種についてはP65表1を参照)

### 鉤 W1 (挿図38 図版24)

S K - 639出土遺物である。舟形隆起部と柄部のみの残存であるが、柄部が柄っぽに装着された状態で出土した。舟形隆起部・柄部とも全面丁寧に加工し、柄の先端部はひとまわり細く削られている。残存値は舟形隆起部が全長11.4cm・幅7.9cm・厚さ7.3cm・柄部が全長6.8cm・径3.4~4.2cmを測る。

### 板状木製品 W2~W11 (挿図38・39 図版24)

W2は、一部が欠損するものの全面丁寧に加工し、隅に3~5mmの穴を開け樹皮による目止めを施す薄い板材である。残存値は、全長25.2cm、幅4.9cm、厚さ0.8cmを測る。W3はS K - 620出土で、弥生時代前期の土器と共に伴する。全面丁寧に加工し、片面中程に幅4mm深さ2mmの刻みを入れる。残存値は、全長46.6cm、幅5.6cm、厚さ2.4cmを測る。W4~W9は残りが悪く、加工面が確認できる程度で用途等については不明である。W8はS K - 618出土で弥生時代前期の土器と共に伴する。W10は、約2分の1が残存しており、上下面・周縁部を丁寧に加工する蓋であろうか。木の遺存状態からしてかなり新しい時代のものと判断する。残存値は、全長15.0cm、幅5.1cm、厚さ0.6cmを測る。W11はS K - 627出土遺物である。両面を粗く加工し先端部を両側から削り薄くする。残存値は全長81.6cm、幅10.6cm、厚さ4.1cmを測る。形態からして掘り具であろうか。

### 棒状木製品 W12~W27 (挿図39・40 図版24・25)

W14は先端部のみ加工するが、片面は平坦面をつくり反対面はこぶを残すように仕上げる。残存値は全長101.0cm、幅2.7cm、厚さ2.4cmを測る。W14・W15はS K - 644出土遺物で、弥生時代前期の土器と共に伴する。W20~W22は両面あるいは全面加工を施す。W20は先端部を丸く、W21は尖らせ気味に仕上げる。W21はS K - 618出土で、弥生時代前期の土器と共に伴する。W27は、先端部のみ加工しY字状の形態をもつ。残存値は全長39.1cm・幅2.4cm・厚さ2.1cmを測る。その他の棒状木製品は、先端をカットする等の簡単な加工を施すにとどまる。

### 杭 W28~W37 (挿図40 図版25)

W28は先端部がつぶれる杭である。W28~W30・W33・W35是比较的頑強で、他の杭はやや弱い感がある。W29・W34はS K - 640、W31・W33はS K - 639出土遺物であるが、上からの混入も考えられる。

### 3 石 器 (挿図41 図版25)

本遺跡より出土した石器は、S1・S2の2点である。

S1は、板状の石材を素材とし長方形に加工する打製石斧である。石材は非常にもろく、剥離面が不明瞭な部分もあるが、比較的細かな調整を施す。S2は、平面形・断面形ともほぼ長方形を呈す砥石であろうか。上下面に磨面が認められる。

### 4 編 龍B1 (挿図41 図版26・27・30・31)

S K - 620内北東部は底面直上より編籠B1が出土した。弥生時代前期の土器と共に伴する。B1は胴部を一部欠損するが完形品に近い遺物で、ひっくり返った状態で検出した。B1は土圧により形が歪められているが、残存値は、底部径12.2~13.3cm、胴部径19.1cm、胴部高さ5.1cm程度である。素材は蔓のようで、材の太さは、細いところで2mm太いところで3.5mm程度である。B1の編み方は、縄文時代の籠によく見られる網代編みの手法ではなく、縫条に対し経条を絡めながら編み上げていく手法で、編み上がった時点では放射状にのびる経条の目だけが観察できるものである。実測図中で、縫条が観察できる部分は経条が欠損する部分である。

鳥取県内における籠製品の出土例として、鳥取市布勢遺跡(縄文時代後期・もじり編み)、岩美郡福部村栗谷遺跡(縄文時代後期・網代編み)があげられるが、弥生時代のものは今回が初めてであり、編み上げの手法も加えて非常に興味深い資料である。

### 第3節 小 結

福岡遺跡6区は、平成2年度に調査を行った1区と2区の間にあたる。福岡遺跡1区～5区の調査については既に報告書を刊行しているので参照して頂きたい。以下、福岡遺跡6区の調査で検出した遺構・遺物を概観してまとめとする。

**遺 構** SK-601～648の土坑48基、SD-601～604の溝4基、Pit-601のピット1基を検出した。土坑については、出土土器より時期が判明したもの15基はすべて弥生時代前期であった。前回の調査の際、1区で確認した11基の土坑のうち、時期が判明した3基は弥生時代前期、2区で確認した253基のうち、55基が弥生時代中期後葉、13基が古墳時代であった。1区・6区には弥生時代前期の土坑群、2区には弥生時代中期後葉と古墳時代の土坑群が存在したことになる。

土坑の形態は規格的でなく、いびつな平面形をもつもの、底面に凹凸が見られるもの、壁面の立ち上がりが部分的に内傾したり外傾したりするものが多い。埋土の堆積はSK-612・619等のような不自然な状況も見られ、埋土中に当時の地山の粘質土をブロック状に含むものが多い。また、SK-627では掘削具と考えられるW11が出土している。これらのことから、土坑の性格を粘土採掘坑と考える。

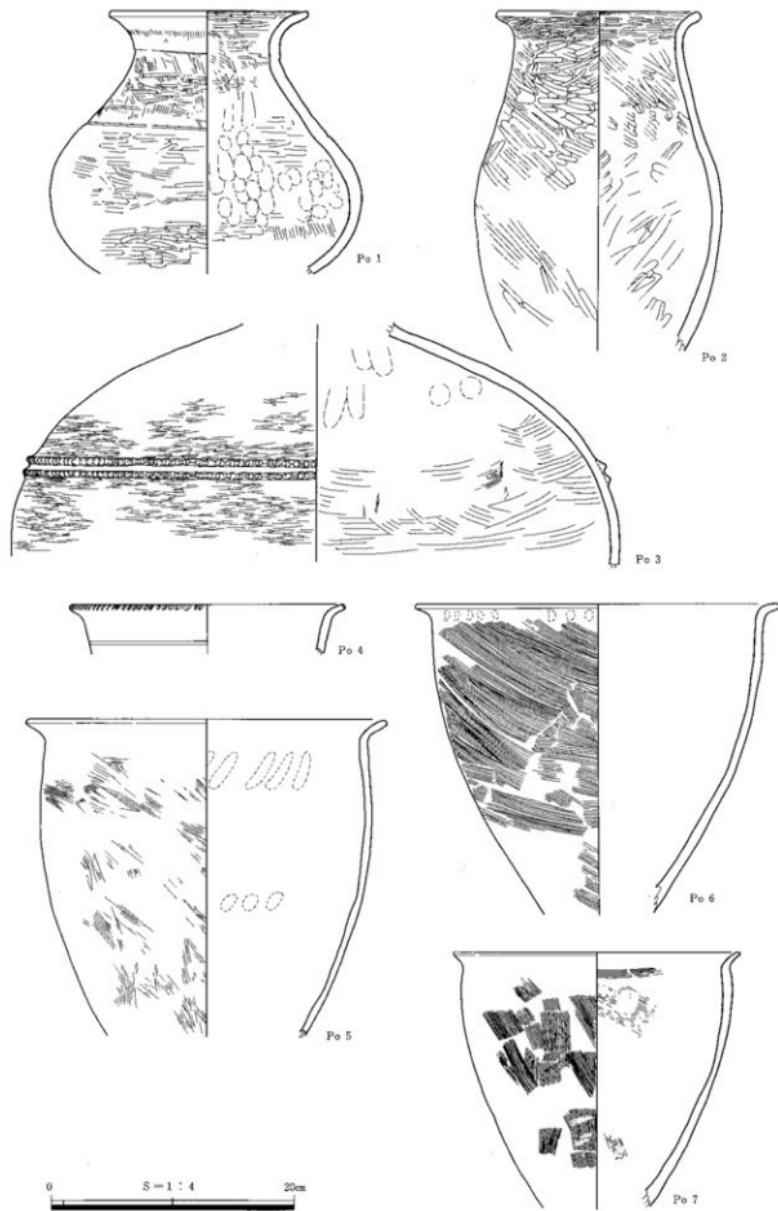
溝は、1区・2区でも数基確認していると同様、自然小河川である。ピットは1基のみ検出したが、性格等については不明である。

**遺 物** 今回の調査により、弥生土器・古墳時代以降の土器・木製品・石器・編籠が出土した。

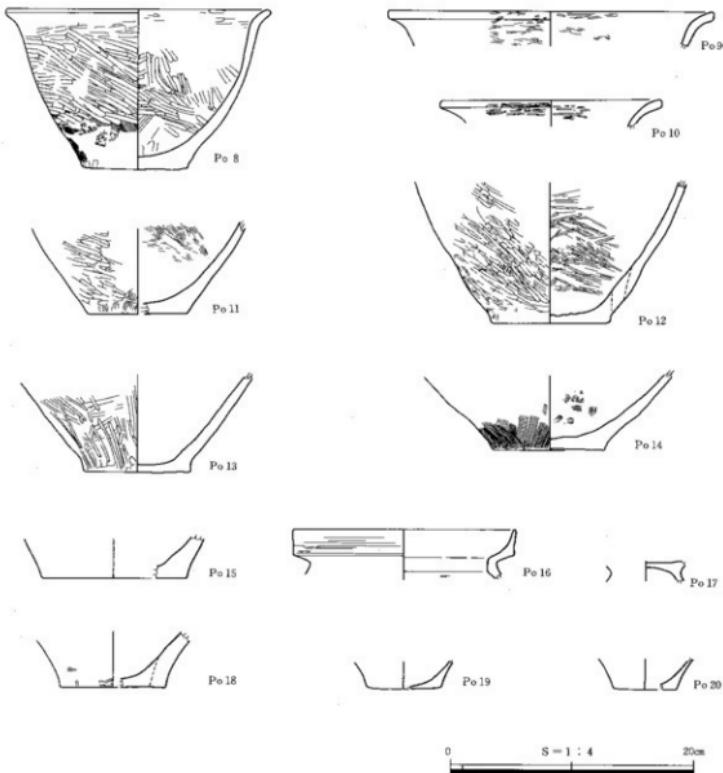
弥生土器は、Po1～Po8等前期後半に位置づけられるものが中心で、少量ながら後期の土器も出土している。Po1は頸部に段を残し肩部に沈線をひく。Po3は赤彩を施す胴部片で2条の刻み目突帯をもつ。古墳時代以降の土器としては、6C後半～末の坏蓋・坏身、甕片、時期不明の土師質土器が出土している。

木製品は、鉗・板状木製品・棒状木製品・杭が出土しており、弥生時代前期の土器を共伴するものが7点ある。杭については、上からの混入が考えられる。石器は、打製石斧と砥石が2点出土したのみである。その他に、SK-620より編籠B1が出土した。共伴土器より弥生時代前期と考えるが、鳥取県内には該当時期の類例はなく、その編み上げの手法についても非常に貴重な資料である。

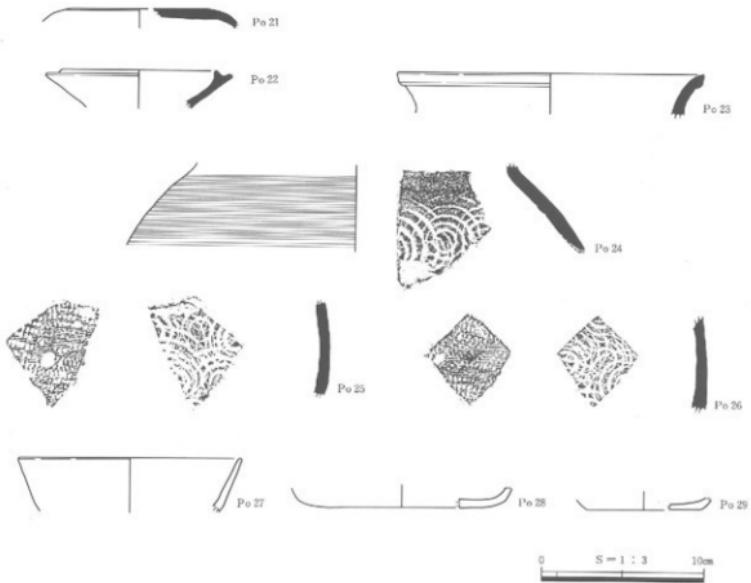
最後に、今津塚田遺跡・福岡遺跡の発掘調査の実施及び報告書の作成に際して、指導・助言・協力頂いた各位に感謝の意を表します。



挿図35 福岡遺跡6区土器実測図（1）



插図36 福岡遺跡6区土器実測図(2)



挿図37 福岡遺跡6区土器実測図（3）

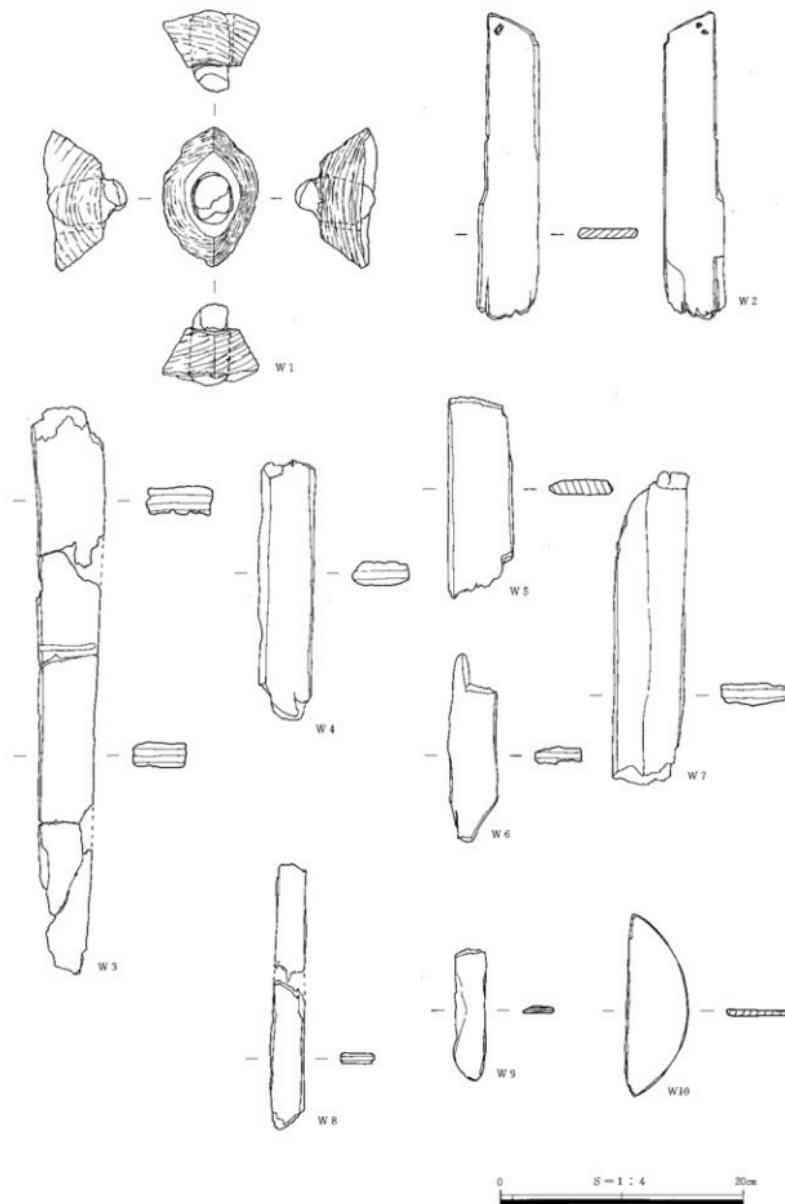
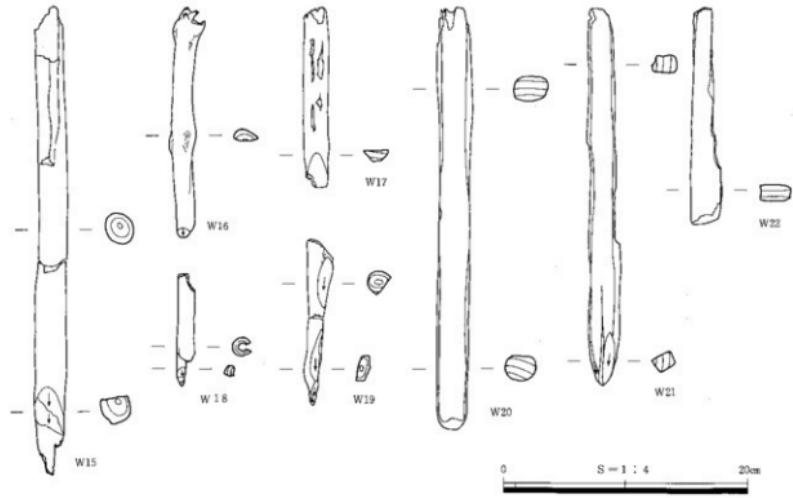
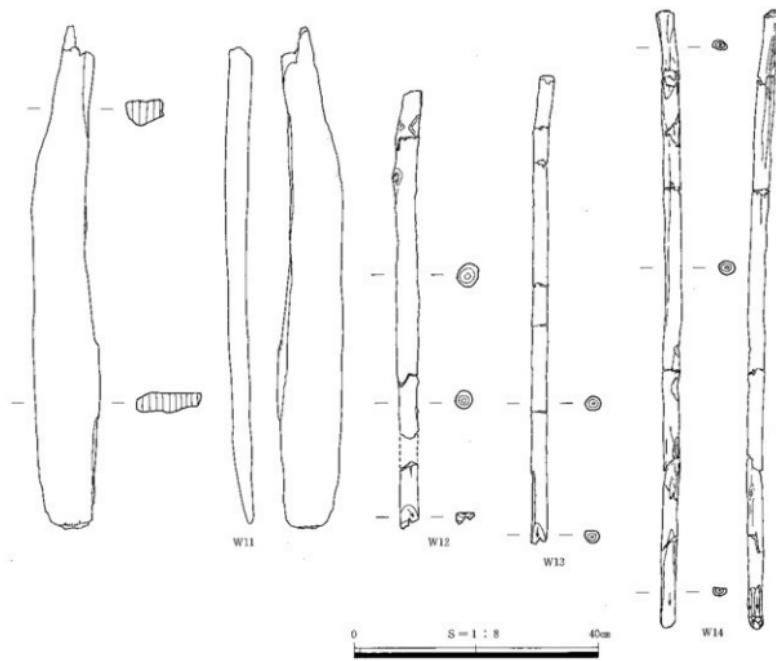
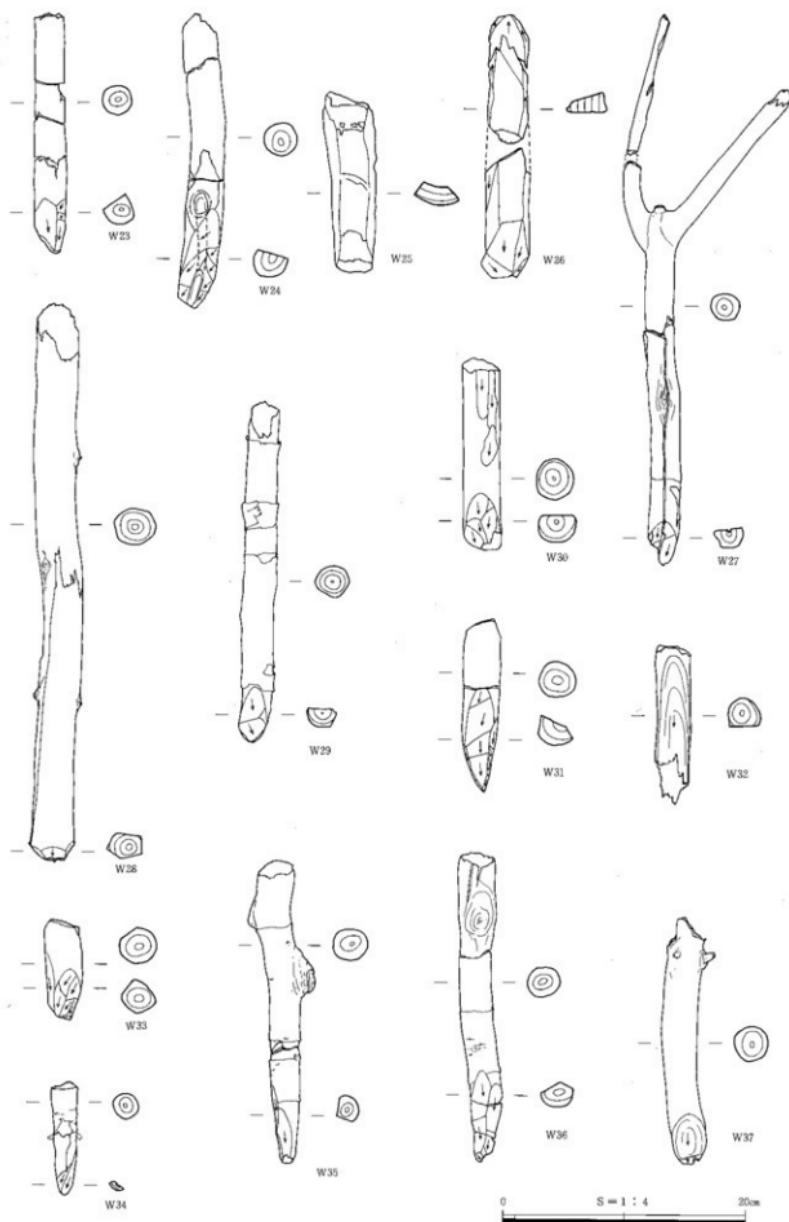


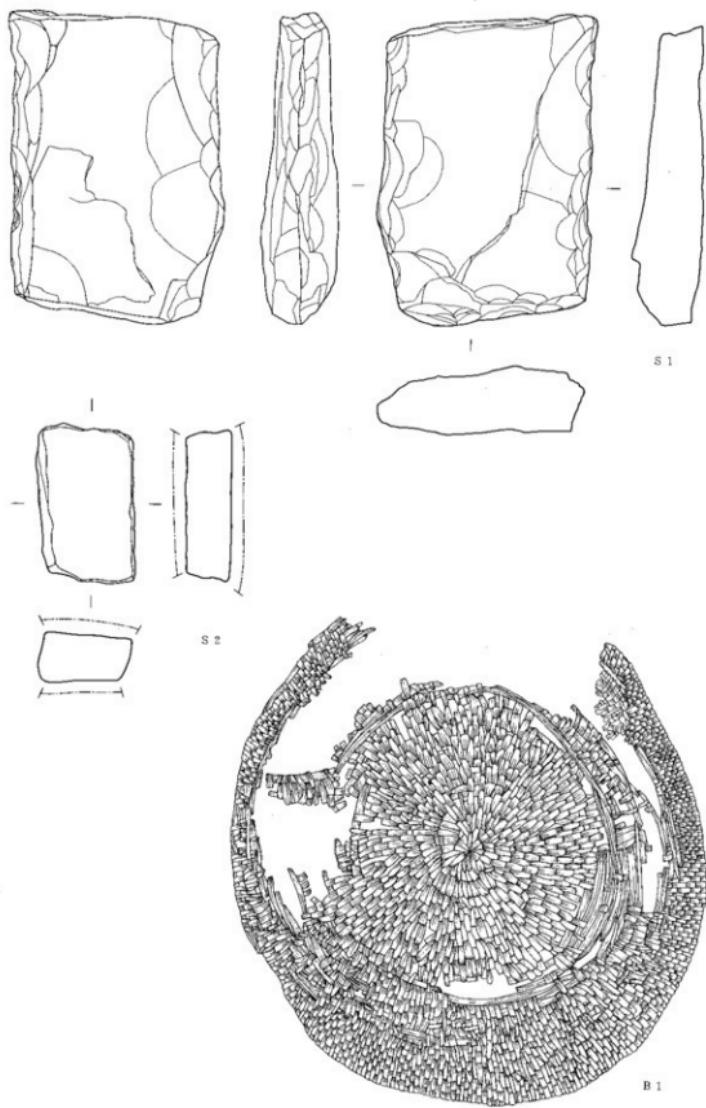
插图38 福岡遺跡6区木製品実測図（1）



押図39 福岡遺跡 6 区木製品実測図 (2)



插図40 福岡遺跡 6区木製品実測図（3）



0 S = 1 : 2 10cm

插图41 石器・編籠実測図

挿表6 福岡遺跡6区土器觀察表

①口径 ②器高 ③最大径 ④底部径 ※復元値 △残在値 ◎推定値

遺物番号 採取番号	取上番号	出土位置	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎 土	燒 成	色 調	備 考
Po 1 35 22	1168 1115	S K-644	壺	◎16.6△ ◎21.7△ ◎25.9△	口縁部はゆるやかに外反し、縁部 は平底面をもつ。腹部に段を残し、 肩部に浅擦を施す。	舟形ハマメ(後述)の丁寧なヘラミ ガキ。凹面口縁部へ強めにかけ てはハマメ後でラミガキがあら く。ナメを施す。ところどころ 粗粒状。	泥。1~3 mmの砂粒含 む	良好	内外面灰 青褐色	削下部外側に スス付着
Po 2 35 22	1040	S K-631	壺	◎17.2 ◎29.3△ ◎20.8	口縁部はゆるやかに外反し、縁部 は平底面である。腹部は長く、 肩部はあまり張らない直筒型である。	舟形ハマメ外側は橢円形。肩部の 外表面はカーブの方へ。縁部は 舟形。	泥。2~3 mmの砂粒含 む	良好	内外面灰 青褐色	外腹側部中央 以上スス付着 舟形部外側ス 付着
Po 3 35 22	1169	S K-645	壺	◎19.4△ ◎59.2△	胴部は直線的で腰より下でやとこ との組み目を施してから、胴部 は段となり垂り出し、側縁を改 めにする。	舟形丁寧なヘラミガキ。内面ハ マメ工具による調整及びナメ。	泥。1~5 mmの砂粒多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹側部中央 以上スス付着 舟形部外側ス 付着
Po 4 35 23	1010 1015	壺	◎23.2△ ◎25.1△	1.壺部はゆるやかに外反し、輪 辯には刻み目を施してから、側縁 部に比較的引く。	外腹スス付着の為調整不分明内面 は舟形である。	泥。砂粒含 む	良好	内外面灰 青褐色	外腹スス付着	
Po 5 35 22	1041	S K-628	壺	◎26.5 ◎26.9△	口縁部はゆるやかに外反する。 側縁部は折伏ふくらむ。	舟形口縁部へ肩部はコナデ。 側縁部ははらうひぎ及びナメ。 内面口縁部はコナデ。肩部以 外はナメ。	やや粗。2 ~3mmの石 英多量含む	良好	内外面灰 青褐色	内外面ス付着
Po 6 35 22	1061 1066 1064	S K-606 S K-606 S K-604	壺	◎30.2△ ◎25.8△	口縁部は短く外反する。輪辯は 若干ふくらみ、底部にかけて直 線形に仕上げる。	外腹口縁部ヨコナデ。輪辯以下 ハマメ。内面口縁部ヨコナデ。 輪辯以下ナメ。	やや粗。2 ~3mmの砂 粒含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹ス付着 内面削下部ス 付着
Po 7 35 22	1067 1078 1097 1104 1107	C13 C13 C13 S K-629 S K-641	壺	◎25.8△ ◎21.1△	口縁部は短く外反する。輪辯は 若干ふくらむ。	外腹口縁部ヨコナデ。輪辯以上 ハマメ。内面口縁部ヨコナデ。 輪辯以下ナメ。	やや粗。3 mm以下の石 英多量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹削下部ス 付着
Po 8 35 23	1014 1029	S K-618 S K-618	鉢	◎27.7△ ◎21.7△ ◎8.9△	口縁部はゆるやかに大きめ外反 する。輪辯は折伏ふくらみで安定 した直底である。	口縁部外側ヨコナデ。脚部下部 ハマメ。その他の部位は丁寧なヘラミ ガキ。	泥。2mmの 砂粒多量含 む	良好	内外面灰 青褐色	外腹削下部ス 付着
Po 9 35 23	1038	S K-619	口縁部	◎26.8△ ◎6.0△	口縁部はゆるやかに外反し、輪 辯は丸みをもつ。	舟形丁寧なヘラミガキ。	泥。1~2 mmの砂粒含 む	良好	内外面灰 青褐色	
Po 10 35 23	1039	S K-632	LJ縁部	◎16.5△ ◎1.9△	口縁部はゆるやかに外反し、輪 辯は丸みをもつ。	口縁部外側ヨコナデ。輪辯以下 ナメ。内面口縁部ヨコナデ。	泥。1~3 mmの砂粒多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹ス付着
Po 11 35 23	1019 1035	S K-620 S K-620	直底	◎27.1△ ◎2.8△		輪辯ハマメ及びヘラミガキ。内 面ハマメ及びナメ。	泥。1~3 mmの砂粒多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹ス付着
Po 12 35 23	1068 1065	S K-628 S K-634	直底	◎21.8△ ◎18.1△	輪辯から脚下部にかけて屈曲を もつ。	直底外側ヨコナデ。その他の部分 はヘラミガキである。	泥。2mmの 砂粒多量含 む	良好	内外面灰 青褐色	外腹ス付着
Po 13 35 23	1016	S K-621	直底	◎21.1△ ◎8.6△	直底から脚下部にかけて屈曲を もつ。	外腹丁寧なヘラミガキ。内面ナ メ。	泥。5mm程 度の石英多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	内外面ス付着
Po 14 35 23	1037	S K-625	直底	◎26.2△ ◎9.3△	直底から脚下部にかけて若干屈 曲をもつ。	外腹底面あらいハケメ及びナメ。 内面ナメ。内出あらいハケメ及 びナメ。	泥。0.5mm以 下の石英多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	内外面ス付着
Po 15 35 23	1035	右底	右底	◎23.3△ ◎12.2△		輪辯外側は削離の跡痕が不明確。 その他の部位はナメ。	やや粗。2 ~3mmの石 英多量含む	良好	内外面灰 青褐色	内外面ス付着
Po 16 35 23	1088	D 13	口縁部	◎18.5△ ◎3.8△	複合口縁をもつ。	外腹口縁部へ肩部ヨコナデ。内 面口縁部へ頸部ヨコナデ。剥離 部へナメ。	泥。2mm程 度の砂粒多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹ス付着
Po 17 35 23	1010	脚部	脚部	◎1.7△	脚部の脚部か?	脚部の剥離がひどい為調査不明。 その他の部位はナメ。	やや粗。1 mm程度の砂 粒多量含む	良好	内外面灰 青褐色	
Po 18 35 23	1066 1068	S K-606 S K-608	直底	◎24.6△ ◎9.6△		内外面ナメ。 外側にハケメ残る。	泥。2mm程 度の砂粒多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹一部スス 付着
Po 19 35 23	1050	D 12	底部	◎22.1△ ◎6.4△		内外面ナメ。	泥。1mm以 下の砂粒多 量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹ス付着
Po 20 35 23	1050	D 12	直底	◎20.5△ ◎5.4△		内外面ナメ。	やや粗。1 mm以下砂 粒多量含む	良好	内外面灰 青褐色	外腹ス付着
Po 21 35 23	1072	D 13	直底	◎20.8△	大升溝と口縁部の痕が不明確。	外腹天井部は左方向の削離へハ マメ。他は底部ナメ。内腹天井部 の中央は不整ナメ。直底は削離 ナメ。	泥。0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 白色	

挿表 6 福岡遺跡 6 区土器観察表

遺物番号 福岡遺跡 区分	取上番号	出土位置	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
Po22 37 23	1036		片身	①9.5cm ②約4.5cm ③約11.0cm	立ち上がりは短く内傾し、受部 は外上方へぐる。薄手である。	内外面とも残存部は回転ナメ。 底は0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色		
Po23 37 23	1055 1065	C13 D12	盤口縁	①19.0cm ②22.5cm	口縁部外腹有り。磨拭が施し い。	内外面ともナメ。	底は0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外灰白 色外灰灰 色	
Po24 37 23	1072	D13	裏	約25.6cm		西面外表面は格子ふうタキ後あらいか キメ調査。肩部内面は同心円文タキ。	底は0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色	
Po25 37 23	1053	C12	裏			外周格子ふうタキ後あらいか キメ調査。内面同心円文タキ。	底は0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色	
Po26 37 23	1115		裏			外周格子ふうタキ後あらいか キメ調査。内面同心円文タキ。	底は0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色	
Po27 37 23	1065	D12	皿	①14.0cm ②3.4cm	口縁は外上方に立ち上がり端部 は薄く仕上げる。	内外面ナメ調査。	底は0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色外赤赤 色	内外丹塗り
Po28 37 23	1015		碗形	約21.2cm ④13.3cm	底部と側部の縁の接が明顯であ る。	内外面ナメ調査。	底は0.5mm以 下の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色外赤赤 色	内外丹塗り
Po29 37 23	1065	D12	底部	⑤0.6cm ⑥7.5cm	底部と側部の縁の接が明顯であ る。	内外面ナメ調査。	底は1mm程 度の砂粒少 量含む	良好	内外面灰 色	内外丹塗り

挿表 7 福岡遺跡 6 区木製品一覧表

遺物番号	捕図番号	図版番号	取上番号	出土位置	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴	種別
W 1	38	24	1091	S K-640	11.4 6.8	7.9 3.4	7.3 4.2	舟形彫起部と釘つぼに装着された鈎の一部が残存する。 鈎の先端はひときわ丸く削る。 舟形彫起・柄部とともに全断面に加工する。	鉢
W 2	38	24	1066	D12	25.2	4.9	0.8	一概に削るが、全断面に加工する。薄い板材である。 裏に穴を開け、樹皮により目止めをする。	板状木製品
W 3	38	24	1018	S K-629	46.4	5.6	2.4	全舟丁寧に加工する。中程に幅4mm深さ2mmの彫みを入 れる。	板状木製品
W 4	38	24	1033	S K-627	21.4	4.5	2.0	舟彫加工。側縁部は欠刻 の一部擦り焦げる。	板状木製品
W 5	38	24	1087	C12	16.6	5.2	1.3	舟彫丁寧に加工する。	板状木製品
W 6	38		1034	S K-627	15.5	4.0	1.5	舟彫丁寧に加工する。	板状木製品
W 7	38	24	1026	S K-627	39.1	2.4	2.1	舟彫加工	板状木製品
W 8	38	24	1042	S K-618	21.9	2.8	1.0		板状木製品
W 9	38	24	1052	S D-603	10.8	2.5	0.6	舟手で両面丁寧に加工する。ナスピ形木製品?	板状木製品
W10	38	24	1045	D12	15.0	5.1	0.6	舟の残存である。両面・周縁部を丁寧に加工する。 茎葉?	板状木製品
W11	39	24	1025	S K-627	81.6	10.6	4.1	舟彫加工 先端部を両面から削りくぼくする。	板状木製品
W12	39	24	1077	D13	57.1	3.5	3.9	先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。 舟彫ののみ加工する。 表面がしつかって残る。	板状木製品
W13	39	24	1024	S K-627	76.7	2.5	2.2	先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。 舟彫ののみ加工する。 表面がな。	板状木製品
W14	39	24	1111	S K-644	101	2.7	2.4	先端部を片側から削りは平坦面をつくるように薄く削り、そ の反対側は先端にコブを残すように加工する。 先端部のみ加工する。	板状木製品
W15	39	25	1116	S K-644	38.4	2.5	2.4	先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。 舟彫ののみ加工する。 表面がな。	板状木製品
W16	39	25	1089	C13	19.0	2.2	1.0	半板材の先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕 上げる。 舟彫ののみ加工する。	板状木製品
W17	39	25	1071	D13	14.9	2.1	1.0	先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。 舟彫である。	板状木製品
W18	39	25	1101	C13	9.2	1.6	1.5	先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。 舟彫ののみ加工する。	板状木製品
W19	39	25	1081	C13	13.6	1.9	2.0	先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。 先端部及び舟彫を加工する。	板状木製品
W20	39	25	1023	S D-691	34.5	2.8	2.1	断面形は長方形に近い梢円形で、先端部は丸い。	板状木製品

挿表7 福岡遺跡6区木製品一覧表

遺物番号	捕団番号	図版番号	取上番号	出土位置	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴	種別
W21	29	25	1043	S K-618	31.0	2.5	2.1	全面加工する。 先端部は4面カット	棒状木製品
W22	39		1032	S K-627	17.8	2.5	1.2	両面加工する。	棒状木製品
W23	40	25	1064	D13	19.7	2.6	2.5	先端部を2面から削り尖らせる。 先端部のみ加工する。 表皮なし 杭か?	棒状木製品
W24	40	25	1079	C13	24.2	2.9	2.6	先端部を片側から削り尖らせる。中央部に節穴が開く。 先端部のみ加工する。 表皮なし 杭か?	棒状木製品
W25	40	25	1060	C13	14.8	3.7	1.5		棒状木製品
W26	40	25	1096	S D-604	21.5	3.3	1.8	先端部のみ加工する。	棒状木製品
W27	40	24	1063	D13	39.1	2.4	2.1	先端部を片側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。 先端部のみ加工する。 Y字状の形態をもつ。	棒状木製品
W28	40	25	1114	C13	45.9	3.4	3.1	先端部を5面カット。使用の為であろうが先端がぶつれる。 先端部のみ加工する心持材である。	杭
W29	40	25	1102	S K-640	28.5	2.7	2.5	先端部を3面カット。 先端部のみ加工する心持材である。 表皮残る。	杭
W30	40	25	1080	C13	15.8	3.1	3.4	先端部を片側から削り、平面面をつくり先端部を尖らせる心持材である。	杭
W31	40	25	1092	S K-639	14.2	3.2	2.9	先端部を3面カット。 先端部のみ加工する心持材である。表皮なし	杭
W32	40	25	1099	C13	13.0	2.7	2.3	先端部を片側から削る。 先端部のみ加工する心持材である。 表皮なし	杭
W33	40		1093	S K-639	8.2	3.1	3.0	先端部を5面カット。 先端部のみ加工する心持材である	杭
W34	40	25	1095	S K-640	9.2	2.1	2.1	先端部のみ2面カットで加工する心持材である。	杭
W35	40	25	1113	C13	25.6	2.9	2.8	先端部を2面カット。 先端部のみ加工する心持材である。 表皮残る。	杭
W36	40	25	1112	C13	25.4	2.7	2.5	先端部を2面カット。 先端部のみ加工する心持材である 表皮残る。	杭
W37	40	25	1082	C12	29.3	2.8	2.9	先端部を片側から削り、平面面をつくり尖らせる。 先端部のみ加工する心持材である。	杭

挿表8 福岡遺跡6区石器一覧表

遺物番号	捕団番号	図版番号	取上番号	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴	種別
S 1	41	25	1069	D13	12.4	8.5	2.8	500	板状の石材を素材とし、長方形に整彫している。 石材は非常にもうろく、剥離面が不明瞭な部分があるが、比較的細かな調整を施す。	石斧
S 2	41	25	1046	D12	6.3	3.8	2.1	110	平面・断面とも長方形に近く、上面下面に磨面が認められる。	砥石